

なか はら
中原 遺跡

発掘調査報告書

1988

掛川市教育委員会
文化係

中原 遺跡

発掘調査報告書

1988

掛川市教育委員会

序にかえて

—— 遺 跡 は 文 化 遺 物 は 心 ——

緑豊かな北方の山々のあいだから掛川市の西側を流れる原野谷川は、その流域にさまざまな段丘や沖積地などを形成し、変化に富んだ景観をみせております。なかでも右岸の吉岡地区から南にひろがる広大な河岸段丘は吉岡原とよばれ、農業地域として、また、重要な遺跡が包蔵されているところとして広く知られております。

そして、これらの地域は水の便もよく肥沃な土地であるところから農耕に適しており、原始時代には既に集落が営まれておりました。その後長い年月を経て、現在は茶生産を中心とする農業地域となっております。しかし産業構造の変化は、茶産業の基盤そのものにも影響をおよぼし、開発行為の適地として急激に変貌しようとしております。

広大な茶園となっているこれらの地域におけるこれまでの遺跡の保存と発掘調査は、おしなべて零細な個人経営者の文化遺産に対する深い認識と理解、また献身的協力によって、今日に至っていると言っても過言ではありません。

このような状況をふまえ、周到な準備と土地所有者の埋蔵文化財に対する深い理解によって吉岡原のなかほど、大塚古墳の北側に位置する中原遺跡の発掘調査は実施されたのであります。

発掘調査は慎重に行われ、その結果、縄文時代中期からの集落跡の一部分であることが明らかになりました。そこには人々の生活に使った土坑、小穴などが多数発掘され、縄文時代の集落の様子を解き明かす貴重な資料を得ることができました。

私たち市民は、先人の歴史の歩みを知る遺跡の保存を、現代社会には無益なものとして否定的に捉えるのではなく、現代の社会は祖先の知恵が結集されて、長い年月をかけて今日に遺された文化遺産の基盤のうえに成り立っていることに留意したいと思います。そして、地道な発掘調査の成果が潤いのあるまちづくりに活かされることを願うものであります。

最後に、本書の刊行にあたり関係者各位の御指導に対し厚く御礼申しあげます。

昭和63年3月吉日

掛川市教育委員会

教育長 伊藤 昌明

例　　言

1. 本書は、昭和62年12月15日から昭和63年3月31日まで実施した静岡県掛川市高田字中原1016外に所在する中原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査地点の地籍は、掛川市高田字東原1083～1084である。
3. 発掘調査は、調査地点で計画された茶園改植に伴う緊急の発掘調査で、国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が実施した。
4. 発掘調査では、土地所有者の大場繁雄氏はじめ周辺の土地所有者から文化財保護に対し深いご理解とご協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。
5. 発掘調査は、掛川市教育委員会の松本一男が担当し、報告書作成にあたり袋井市在住の前田庄一氏からは多大な協力を得ている。記して感謝の意を表したい。
6. 発掘作業ならびに整理作業では、次の方々の参加を得ている。

鈴木辰江・鈴木はつ子・大場せつ・久保田まさ・松浦せい子・松井たつ・石亀まつ・鳥居鈴江
・山本喜久恵・村松さと・高柳きわ・小沢ろく・萩田みさ子・松井しか・松井田鶴子・長谷川幸
子・井野鈴江・鈴木きの・宮崎順子（順不同）

7. 発掘調査ならびに本書作成にあたり次の方々からご協力・ご教示を頂いている。記して感謝の意を表したい。

平野吾郎・松井一明・吉岡伸夫（五十音順）

8. 遺物の実測の一部と遺構・遺物のトレースそして遺構の執筆を前田が、本書の編集・その他の執筆を松本が行なった。
9. 発掘調査事業業務は、掛川市教育委員会教育長伊藤昌明・社会教育課長安達啓・文化係長岩井克允のもとに社会教育課が所管した。
10. 調査によって得た資料はすべて掛川市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 挿図における方位は、磁方位を示す。(1987. 11)
2. 調査によって検出・確認した遺構は次のように表記した。
土坑： S F、溝状遺構： S D、小穴： S P、意味不明遺構： S X
3. 挿図中の遺物番号は、写真図版中の遺物番号と同一である。
4. 第 4 図 S D 01 • S D 02、第 5 図 S D 03 の断面図は距離は80分の 1、高さは40分の 1 の縮尺である。

目 次

序

例 言

凡 例

I	発掘調査と遺跡の概要（松本）	2
1.	調査に至る経緯と調査の目的	2
2.	調査の方法と経過	2
3.	遺跡をめぐる環境	3
II	調査の内容（松本）	6
1.	遺構（前田）	6
i	溝状遺構（S·D）	6
ii	土坑（S·F）	6
iii	ピット（S·P）	15
2.	遺物（松本）	25
i	土器	25
ii	その他の遺物	31
III	成果と課題（松本）	35

挿 図 目 次

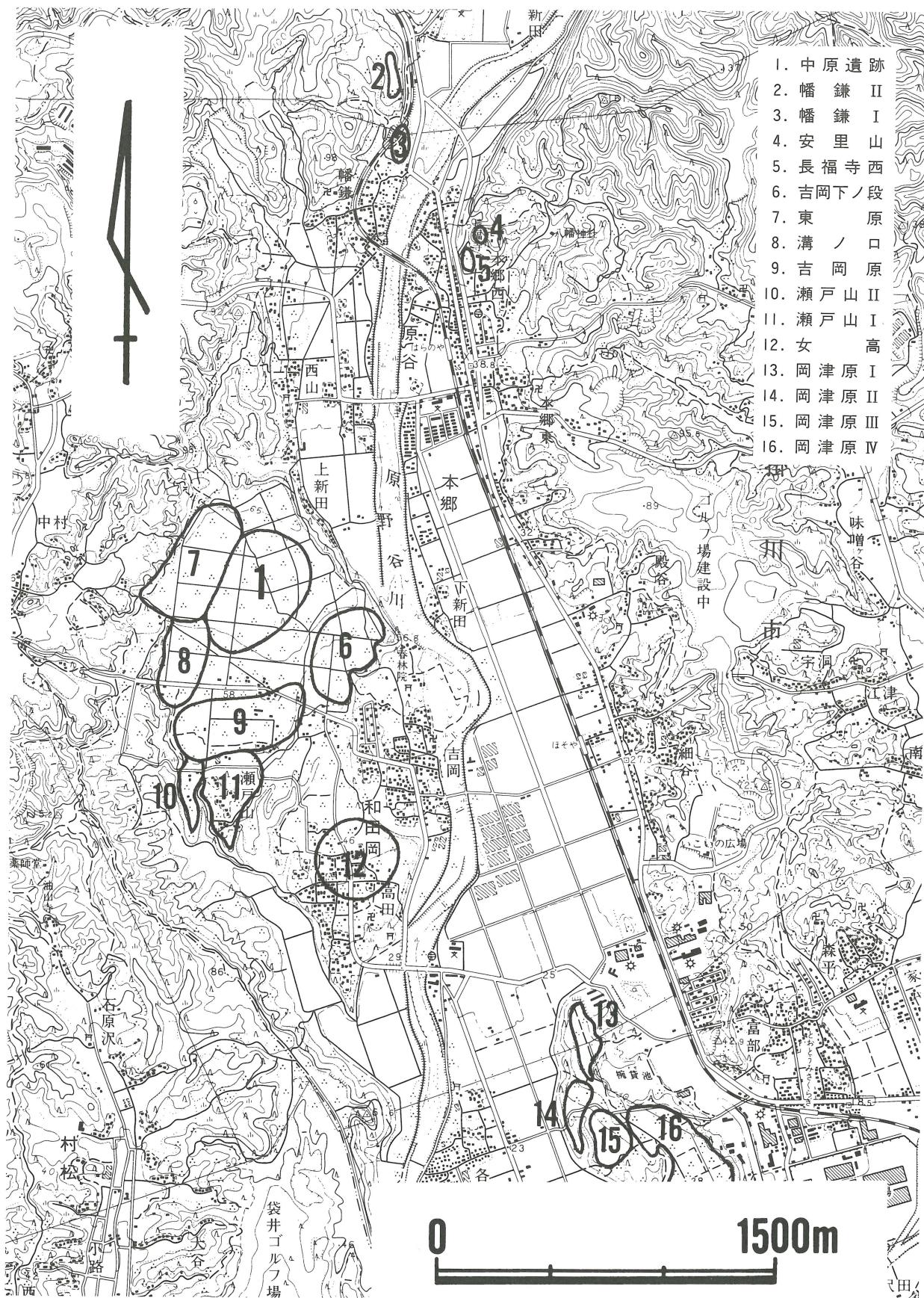
第 1 図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図	1
第 2 図 遺跡の周辺地形図	4
第 3 図 遺構全体図	7
第 4 図 S D 01・02 実測図	9
第 5 図 S D 03 実測図	9
第 6 図 土坑実測図	10
第 7 図 グループ 1 ピット平面実測図	11
第 8 図 グループ 2 ピット平面実測図	11
第 9 図 グループ 1 ピット実測図(1)	12
第 10 図 グループ 1 ピット実測図(2)	13
第 11 図 グループ 2 ピット実測図	14
第 12 図 グループ 3・4 ピット平面実測図	15
第 13 図 グループ 5 ピット平面実測図	15
第 14 図 グループ 3・4・5 ピット実測図	17
第 15 図 グループ 6 ピット平面実測図	18
第 16 図 グループ 7 ピット平面実測図	18
第 17 図 グループ 6 ピット実測図	19
第 18 図 グループ 7 ピット実測図	20
第 19 図 その他のピット実測図(1)	20
第 20 図 その他のピット実測図(2)	21
第 21 図 出土土器(1)	28
第 22 図 出土土器(2)	29
第 23 図 出土土器(3)	30
第 24 図 出土土製品	32
第 25 図 出土石器(1)	33
第 26 図 出土石器(2)	34
第 27 図 出土土器分布図	36

挿 表 目 次

第 1 表 ピット計測表 21

図版目次

- 図版 I 上 調査前全景（南から）
下 北区完掘状況（南から）
- 図版 II 上 中央区完掘状況（北から）
下 南区完掘状況（北から）
- 図版 III 上 作業風景
中 重機稼働風景
下 調査区埋戻し
- 図版 IV 上 S D 01 完掘状況（西から）
中 S D 03 完掘状況（南から）
下 S F 01 完掘状況（北から）
- 図版 V 上 S F 07 完掘状況（南から）
中 S F 08 完掘状況（北から）
下 S F 10 完掘状況（北東から）
- 図版 VI 上 S F 12 完掘状況（北から）
中 グループ 3 ピット完掘状況（南西から）
下 グループ 4 ピット完掘状況（北西から）
- 図版 VII 上 グループ 6 ピット完掘状況（北から）
中 S P 222・223 遺物出土状況（東から）
下 S P 88 遺物出土状況（南東から）
- 図版 VIII 上 出土土器（1～25）
下 出土土器（26～48）
- 図版 IX 上 出土土器（49～60）
下 出土土器（61・62・64～69）
- 図版 X 上 出土土器（70～80）
下 出土土器（81～94）
- 図版 XI 上 出土土器（95～110）
下 出土土器（63）
- 図版 XII 上 出土土製品
中 出土石器（石錘）
下 出土石器（石匙）
- 図版 XIII 上 出土石器（打製石斧）
中 出土石器（石皿）
下 出土石器（磨石）



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図



I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的

掛川市教育委員会では、これまでに中原遺跡の発掘調査を2地点において行なった。昭和56年度⁽¹⁾と昭和58年度⁽²⁾の発掘調査がそれである。両方の報告書でもふれているように、中原遺跡が所在する吉岡原には縄文時代から古墳時代中期に亘り、数多くの遺跡が分布していることが明らかとなっている。なかでも有名なのが古墳時代中期に構築された吉岡大塚古墳・春林院古墳等を始めとする和田岡古墳群⁽³⁾である。そして、これら古墳群を築いたその背景として、それ以外の数多くの遺跡が重要であることは報告書でふれたとおりである。

一方、この吉岡原を始めとする和田岡原一帯は茶栽培の盛んな地区で、近年になり茶の品種改良などに伴う改植作業により、多くの遺跡が消滅してきたことも先の報告書でふれたとおりである。そして、このような状況に対し掛川市教育委員会では、これまでに茶園改植に伴う発掘調査を毎年のように行なってきた⁽⁴⁾。

中原遺跡の今回の発掘調査地点も、個人の茶園改植を契機に国および静岡県の補助金を得て行なった発掘調査で、調査は消滅の免れなくなった遺跡に対し記録保存を目的として行なわれた。

(参考文献)

- (1) 岩井克允・松本一男ほか『中原遺跡発掘調査概報』掛川市教育委員会 1982
- (2) 松本一男『中原遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会 1984
- (3) 内藤晃ほか『春林院古墳』春林院古墳調査委員会 1966
岩井克允ほか『金塚古墳 高圧送電線鉄塔改修に伴う発掘調査報告』掛川教育委員会 1978
平野吾郎ほか『瓢塚古墳 測量調査報告書』掛川市教育委員会 1979
植松章八ほか『吉岡大塚古墳 測量調査報告書』掛川市教育委員会 1980
平野吾郎ほか『各和金塚古墳 測量調査報告書』掛川市教育委員会 1981
- (4) 岩井克允『金鑄原遺跡発掘調査概報』掛川市教育委員会 1982
松本一男『行人塚遺跡発掘調査概報』掛川市教育委員会 1983
松本一男『女高遺跡発掘調査概報』掛川市教育委員会 1985
松本一男『高田上ノ段遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会 1986
松本一男『高田上ノ段遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会 1987
松本一男・戸塚和美『瀬戸山I-a遺跡発掘調査概報』掛川市教育委員会 1987
松本一男・戸塚和美『瀬戸山I-b遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会 1987
松本一男・戸塚和美『吉岡原遺跡発掘調査概報』掛川市教育委員会 1987

2. 調査の方法と経過

今回実施した発掘調査地点は、吉岡大塚古墳の北100m程いった地点である。

発掘調査は、これまでに行なわれた中原遺跡での発掘調査と同様、まず畑耕作土の除去を重機使用により行ない、その後人工による掘削作業を行なった。調査地での排土は、調査地外に置場を確保で

きなかったことから、調査地内で移動させて行なうこととした。したがって、調査ではまず調査地の農道北側区の北側半面を調査し埋め戻しをして、次に農道北側区の南半面と農道南側区を調査することとなった。

調査区画の設定は、調査区の北東端の畠地境杭を起点とし、調査区を東西に横切る農道の北東端に位置する地境杭を見通した線を基準線として設定した。杭打ち作業は、調査区北東端の起点杭を（A—1）杭とし、南の方向 5 m 毎に（A—2）杭、（A—3）杭、（A—4）杭、……… を打った。そして、起点杭（A—1）杭から西方向 5 m 毎に（B—1）杭、（C—1）杭、（D—1）杭、……… を打った。これらをさらに延長して、第 3 図遺構全体図のように、調査区全体に一辺 5 m の方眼の網をかけた。区画の名称は、区画の北東隅に位置する杭の名称をそのまま充てることとした。つまり、ある区画に立ったとき、その区画の北東隅の杭の名称が（D—5）杭であればその区画の名称は（D—5）区と称する。尚、設定した南北方向の区画線（グリッドライン）は、N—1° 18' —Wである。

調査時の検出遺構の位置表示は、すべて上記設定の区画に従い、出土遺物の取り上げもすべて上記区画に従った。

現地での作成図画は、区画にあわせ 20 分の 1 縮尺を基本とし、遺物の出土状況図面等必要に応じ 10 分の 1 縮尺の図面を作成した。また、現地での記録写真はプローニーサイズ（6 × 7）原画白黒、35 mm サイズ原画白黒・カラーリバーサルで撮影した。

次に日程を追いかげながら、調査の経過を記述する。

昭和 62 年 12 月 15 日～12 月 16 日 重機により茶樹抜根。

63 年 1 月 7 日 抜根茶樹の焼却。

1 月 8 日～ 1 月 11 日 重機による耕作土の掘削。

1 月 11 日～ 2 月 10 日 調査区基本杭の設定と区画の設定。人工による荒削り・精査
・遺構の検出・掘削・遺物の取り上げ・写真撮影・図面作成。

2 月 12 日 調査北側区全体の完掘写真撮影。

2 月 13 日～ 2 月 17 日 重機稼働。調査北側区の埋め戻し作業と中央区および南側区の掘削。

2 月 15 日～ 3 月 11 日 人工による荒削り・精査・遺構の検出・掘削・遺物の取り上げ・写真撮影・図面作成。

3 月 12 日 調査中央区および南側区の完掘写真撮影。

3 月 14 日～ 3 月 19 日 調査中央区および南側区の遺構全体図作成。

3 月 23 日 調査地資器材の撤収および周辺整備。

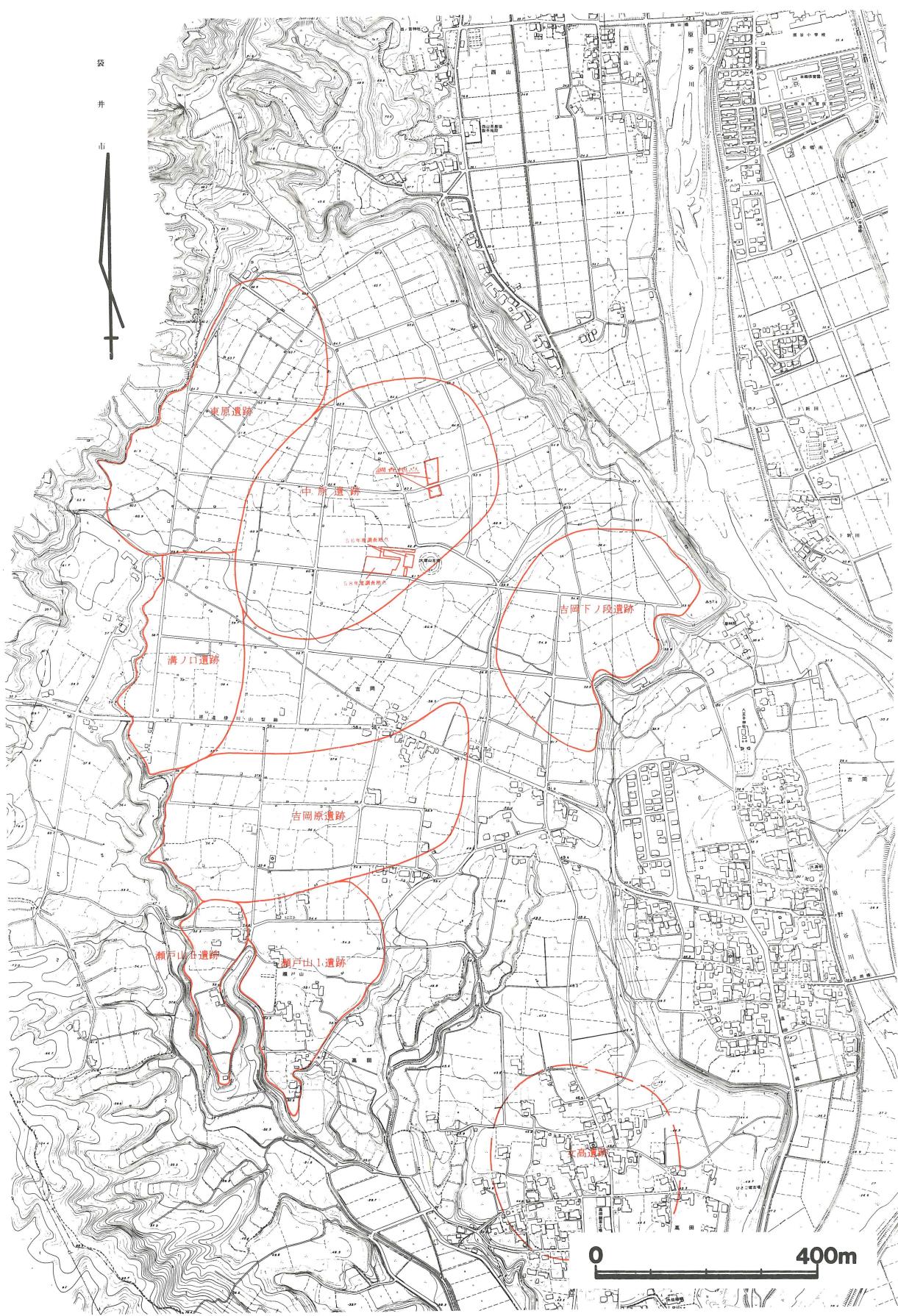
3 月 19 日～ 3 月 24 日 重機稼働。調査中央区および南側区埋め戻し作業・整地作業。

以上をもって今次発掘調査を終了とする。

3. 遺跡をめぐる環境

地理的環境

掛川市街地から車で 10 分程西に向かって走らせると、袋井市との市境に行きあたる。この市境に沿って流れている川が、流域に多くの遺跡をもつ原野谷川である。この原野谷川は、上流域から中流域



第2図 遺跡の周辺地形図

の各所（特に右岸）に河岸段丘を形成している。これらの河岸段丘の多くは小規模なものであるが、今回紹介している中原遺跡の所在する和田岡地区・原田地区・原谷地区では、比較的広い面積をもつ段丘面を成している。このうち和田岡地区に広がる段丘面を和田岡原と称し、標高60m前後の上の段を吉岡原と呼び、その下の段標高40~50mの一帯を高田原と呼んでいる。ちなみに中原遺跡は、上位段丘面の吉岡原に広がりをもつ遺跡である。

これらの河岸段丘を地質学的に観ると、段丘堆積層（白黄褐色の礫層）として紹介されている。実際に現地で確認すると、特に段丘面の端部付近において、表土からすぐの深さでこの段丘堆積層を確認することができる。

吉岡原・高田原付近の地形についてもう少し観察してみる（第3図参照）。特に高田原南側に目を転じてみると、段丘面の南側から幾本もの谷が段丘を切り込んでいることが確認でき、これらにより舌状台地状の地形が形成されていることがわかる。そしてこうした地形の周りには、縄文時代を始めとする多くの遺跡が立地している。逆に、吉岡原に遺跡が多く分布している状況から、現在では埋まってしまい目にすることのできない谷が、数本吉岡原に入り込んでいることが推定できる。

歴史的環境

中原遺跡の所在する和田岡原一帯に多くの遺跡が分布していることは、先に述べたとおりである。ここでは、紙数の関係から、縄文時代に時代の的を絞りその分布について概観してみよう。

掛川市域で縄文時代の遺跡が最も多く分布する地域として、原野谷川流域があげられる。分布の集中する地域は大きく3カ所確認できる。その一つが、萩ノ段遺跡・上ノ段遺跡等の所在する上流域の原田地区、そして中原遺跡・吉岡原遺跡・瀬戸山遺跡等の所在する和田岡地区、もう一つが原野谷川の浸食により独立丘状になった岡津原I~V等が分布する岡津原地区である。これらの地区に分布する遺跡群を時期区分しその分布状況をみると、

- (早期) 原田地区…萩ノ段、和田岡地区…瀬戸山I・II、岡津原地区…黒田（向山）
- (前期) 原田地区…萩ノ段
- (中期) 原田地区…上ノ段・平III・松下・和田、和田岡地区…中原・東原・溝ノ口・吉岡原・瀬戸山I・II・吉岡下ノ段・女高、岡津原地区…岡津原I・II・III
- (後期) 原田地区…上ノ段・平II・鳥淵、和田岡地区…瀬戸山I・中原・吉岡原・吉岡下ノ段、岡津原地区…岡津原I
- (晚期) 原田地区…上ノ段・平III・鳥淵

といった状況である。各地区の遺跡群の動態（盛衰）については、現在のところ資料が少ないとから述べる状況にない。したがってここでは上記遺跡群の在り方を整理して、単に各時期における遺跡の分布状況をまとめておくだけとする。掛川市域において最も古い資料は、原田地区の奥に位置する原里地区の堂山遺跡および和田岡地区の庵ノ下遺跡（吉岡下ノ段遺跡のこと）出土の有舌尖頭器がある。いずれも原野谷川流域の遺跡である。今のところこの二つの遺跡を出発点として、原野谷川の遺跡群は流域を三地域において分布する。縄文時代早期に至り押型文土器を出土する遺跡が上・中流域に分布するが、前期になるとその数は0になる。前期も終末を迎えた十三菩提式期に至り再び萩ノ段遺跡が営まれる。そして、縄文時代の最盛期中期を迎えると、とたんに流域の遺跡数は増加し、その範囲も拡大する。後・晚期に至ると遺跡の数は減少することとなり、晚期では上流域の原田地区にのみ遺跡が分布することとなる。中原遺跡は、こうした縄文時代の動向のなかで縄文時代中期にその繁栄をみた遺跡である。

II 調査の内容

これまでの発掘調査でもそうであったように、今回の調査でも縄文時代中期前葉から中期中葉期を中心とした遺構・遺物が検出・出土している。

調査で検出した遺構は、溝状遺構（S D）が3、土坑（S F）が12、小穴等のピット（S P）が536、その他意味不明遺構（S X）が10である。今回検出した遺構の意味付けについては、土坑はいわゆる土壙墓とは意を異にするものと考えており、そして小穴については後述するように住居跡の柱穴あるいはその他の構築物の柱穴がいくつか含まれるものと考えている。また意味不明遺構については、これまでの報告書で紹介したように風倒木的なものと考えている。

これらの遺構から出土した遺物の内容と、周辺から出土した遺物の内容から、溝状遺構を除く他の遺構はすべて縄文時代中期前葉から中期中葉の時期の構築であると考えたい。それでは、溝状遺構はいつの所産であるか。残念ながら出土遺物がないので明確にできないが、覆土から縄文時代よりも新しく、近現代のものより古いことだけは確かである。意味についても不明である。

したがって、今回の調査で得られた内容は、これまでの調査で確認してきた内容を裏付ける内容であった。

1. 遺構（第3図～第20図）

今回の発掘調査区は、農道をはさんで南側と北側の調査区に分けられる。南側の調査区からは土坑とピット等、北側の調査区からは溝・土坑・ピット等を検出した。

ここでは、溝・土坑・ピットの順に遺構の概要を述べる。

i 溝状遺構（S D）

S D 01（第4図）

A—2区、B—2区、C—2区で検出された。この溝はさらに、調査区の東に続いている。幅は0.4～0.7mを測る。溝底は、東から西に向かいゆるやかに傾斜しており、西端は東端より0.17m低くなっている。覆土は黒色土である。

時期を決める出土遺物はないが、ピット・土坑との切り合い関係、覆土の点から、縄文時代よりも新しい時期と判断される。

S D 02（第4図）

B—2・3区で検出された溝でS D 01に接続する。確認面の幅は約0.4mであるが、南端は広く約1.1mを測る。溝底は、S D 01に接続する部分が最も浅く確認面からわずかに3cmを測るにすぎない。また、この部分のレベルはS D 01とかわらない。S D 02の溝底は起伏がみられるが、中央部分が最も深く、確認面より20cmを測る。覆土は、炭化粒を含む暗褐色土である。

S D 03（第5図）

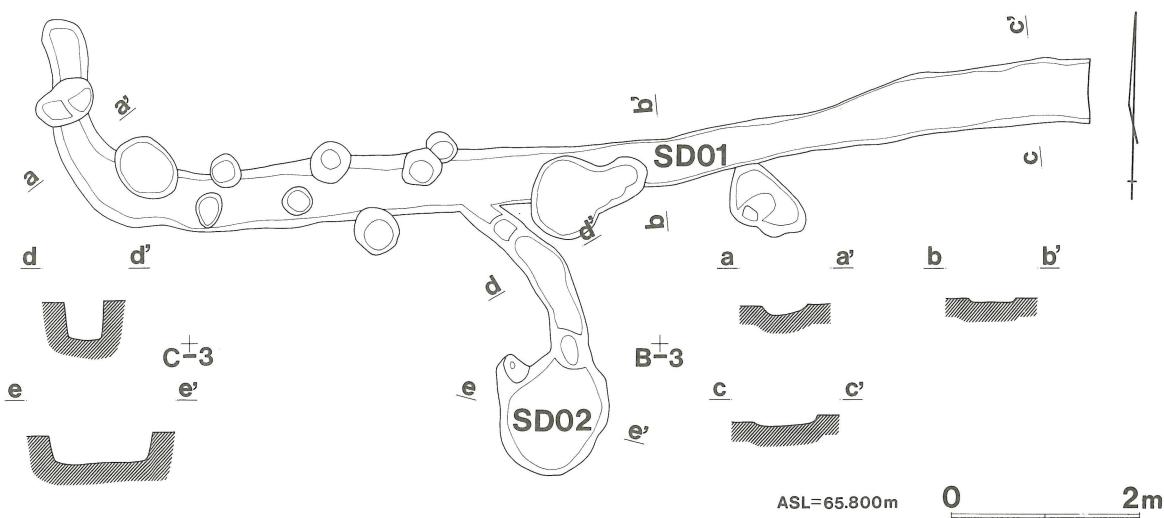
B—7・8区で検出された溝で、北端は調査区内で完結する。南端部分では、B—8区内 90°西に向きを変え、調査区外に延びていたことを確認している。覆土は炭化粒を含む黒色土。

ii 土坑（S F）（第6図）

今回の調査では、南側調査区で4基、北側調査区で8基の計12基の土坑を検出しているが、このう



第3図 遺構全体図



第4図 SD 01・02 実測図

の8基について報告する。

S F 01

C—2区で検出された。規模は、長径1.06m、短径0.82mの橢円形状を呈する。遺構の南端には、東西約0.5m、南北約0.3mの張り出した部分があるが、これは別の遺構の可能性がある。底面は平坦ではなく南半分が溝状を呈し、1段深くなっている。この部分で確認面からの深さ0.26mを測る。

S F 02

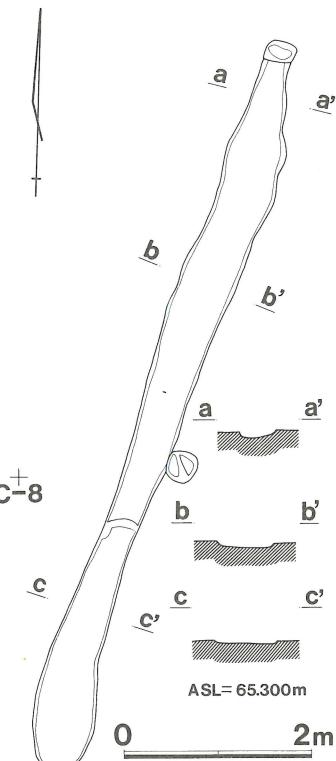
A—2区SD 01の南に隣接する。遺構の北端はSD 01に切られていると判断される。規模は、長径0.95m、短径0.59mを測り、台形状を呈する。確認面から底面までの深さ0.15mを測る。底面の南西隅は約6cm高くなっている。

S F 04

B—3区で検出された。規模は、長径1.17m、短径0.58mを測る。確認面から底面までの深さ0.2mを測る。底面の南西隅には四角く約9cm高い部分がある。また、底面中央の北寄りには、円形の約5cm高い部分がある。

S F 07

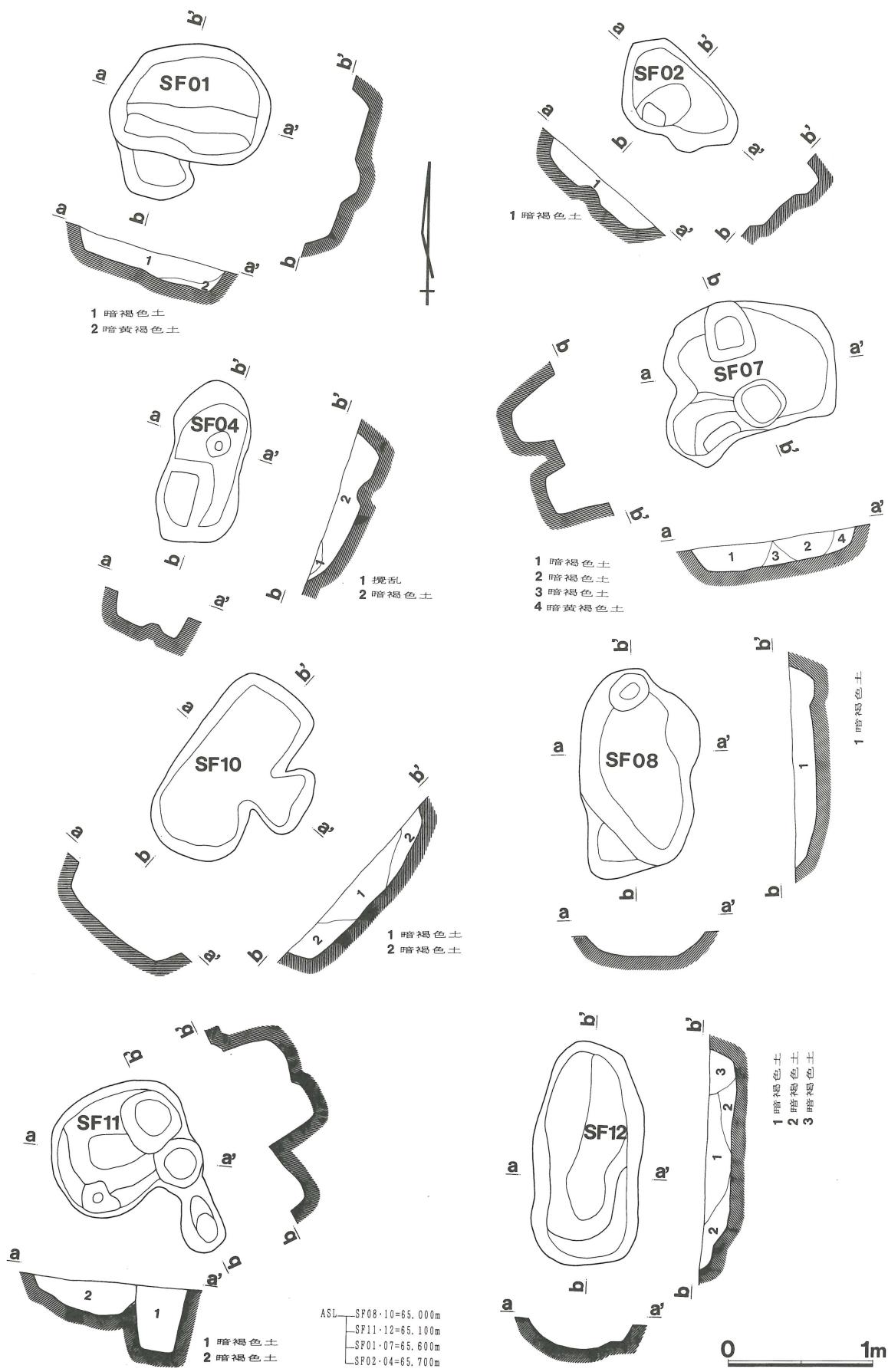
D—2区で検出された。規模は、長径1.19m、短径0.96mを測る。底面の南西隅は三日月状に5cmほど深くなっており、この部分で確認面より21cmの深さを測る。覆土中から北屋敷式または中原系と思われる土器片と黒曜石片3点が出土している。



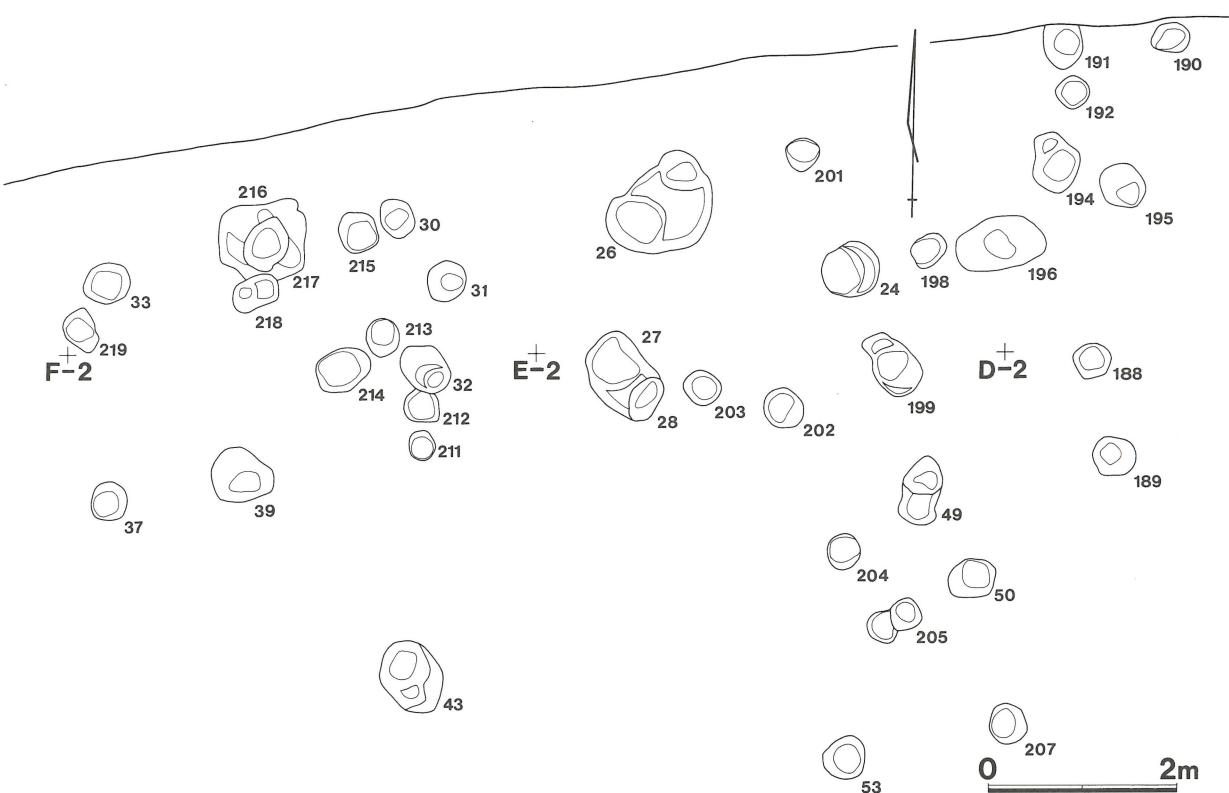
第5図 SD 03 実測図

S F 08

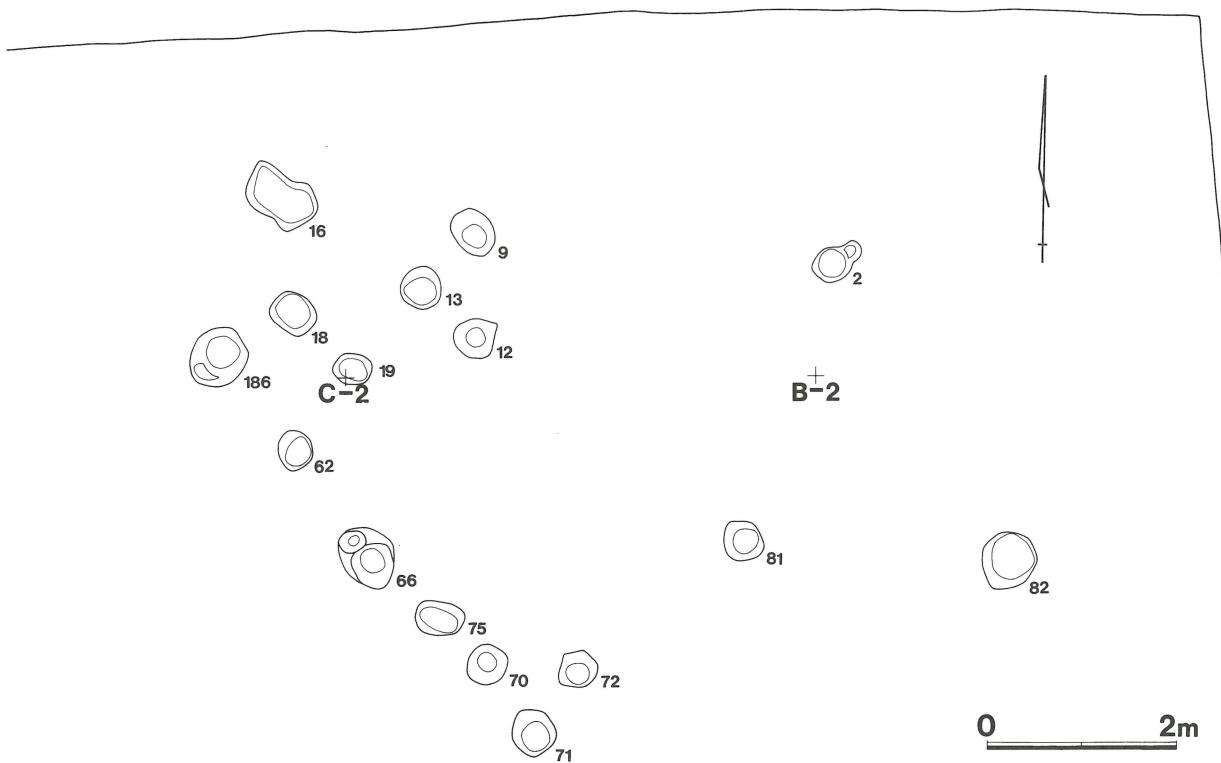
D—14区で検出された。規模は、長径1.37m、短径0.83mを測る。確認面から底面までの深さ0.16mを測る。遺構の南西隅には三角形のテラス状の部分があり、底面より7cm高くなっている。覆土中から22図—54が出土している。



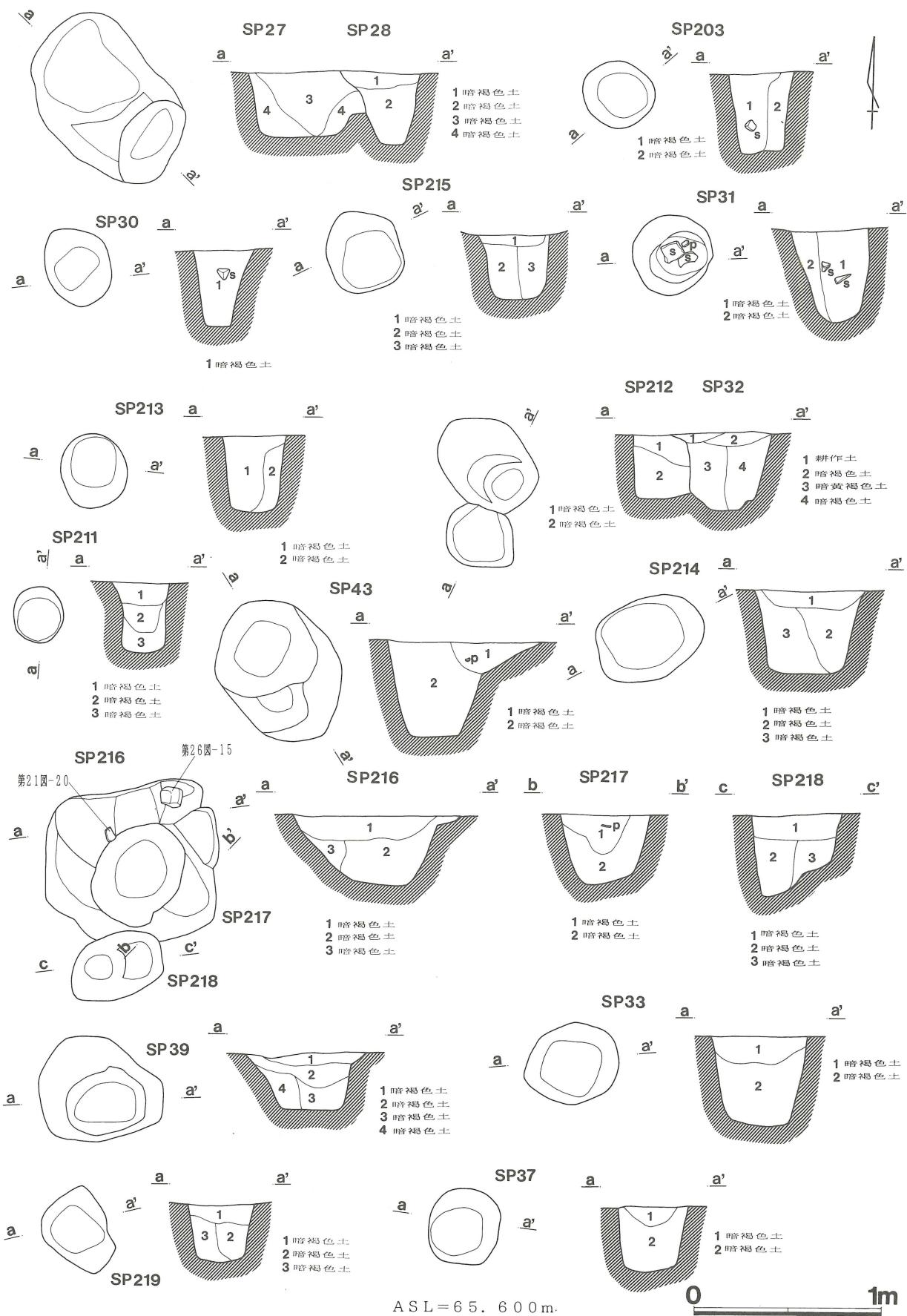
第6図 土坑実測図



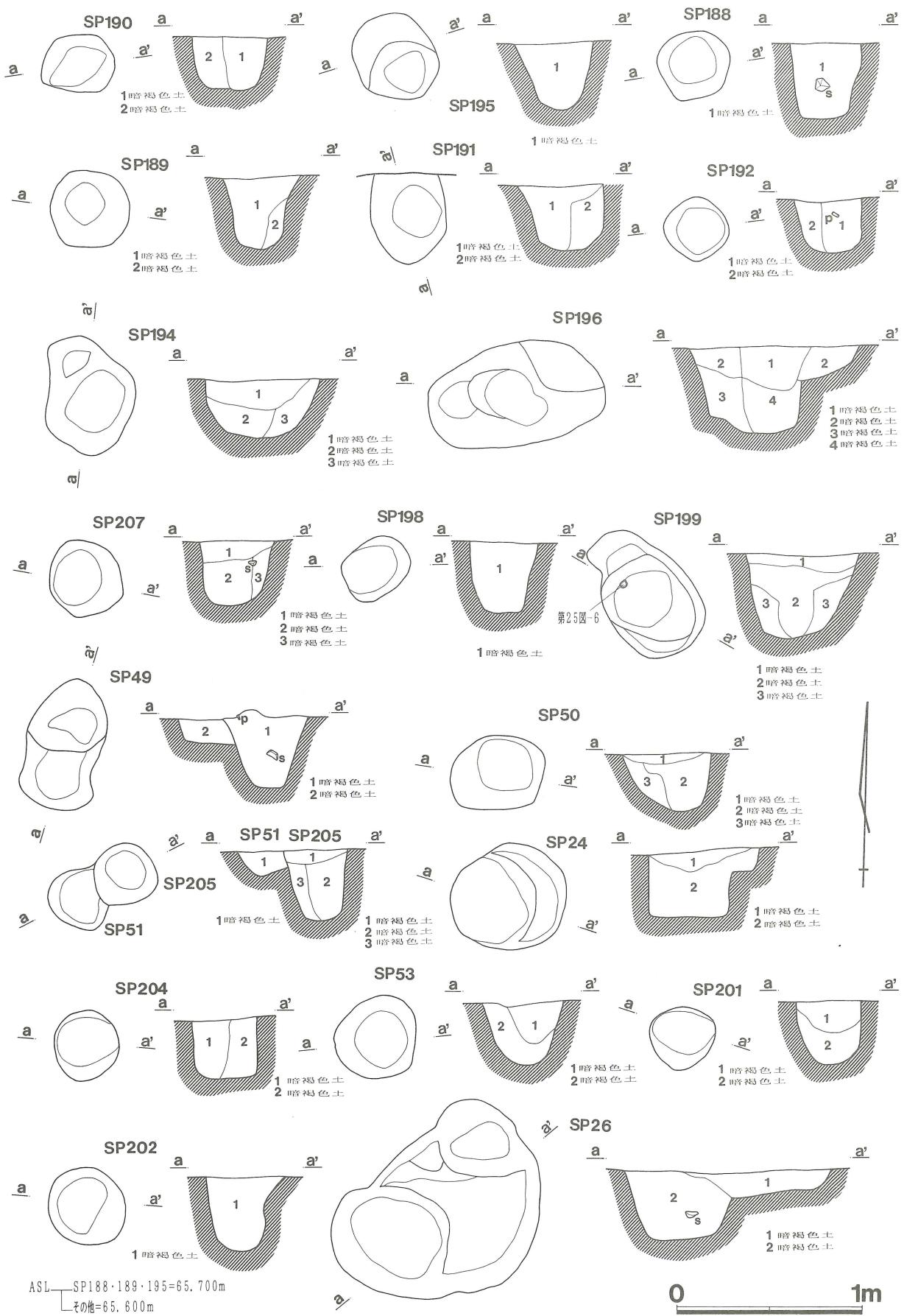
第7図 グループ1ピット平面実測図



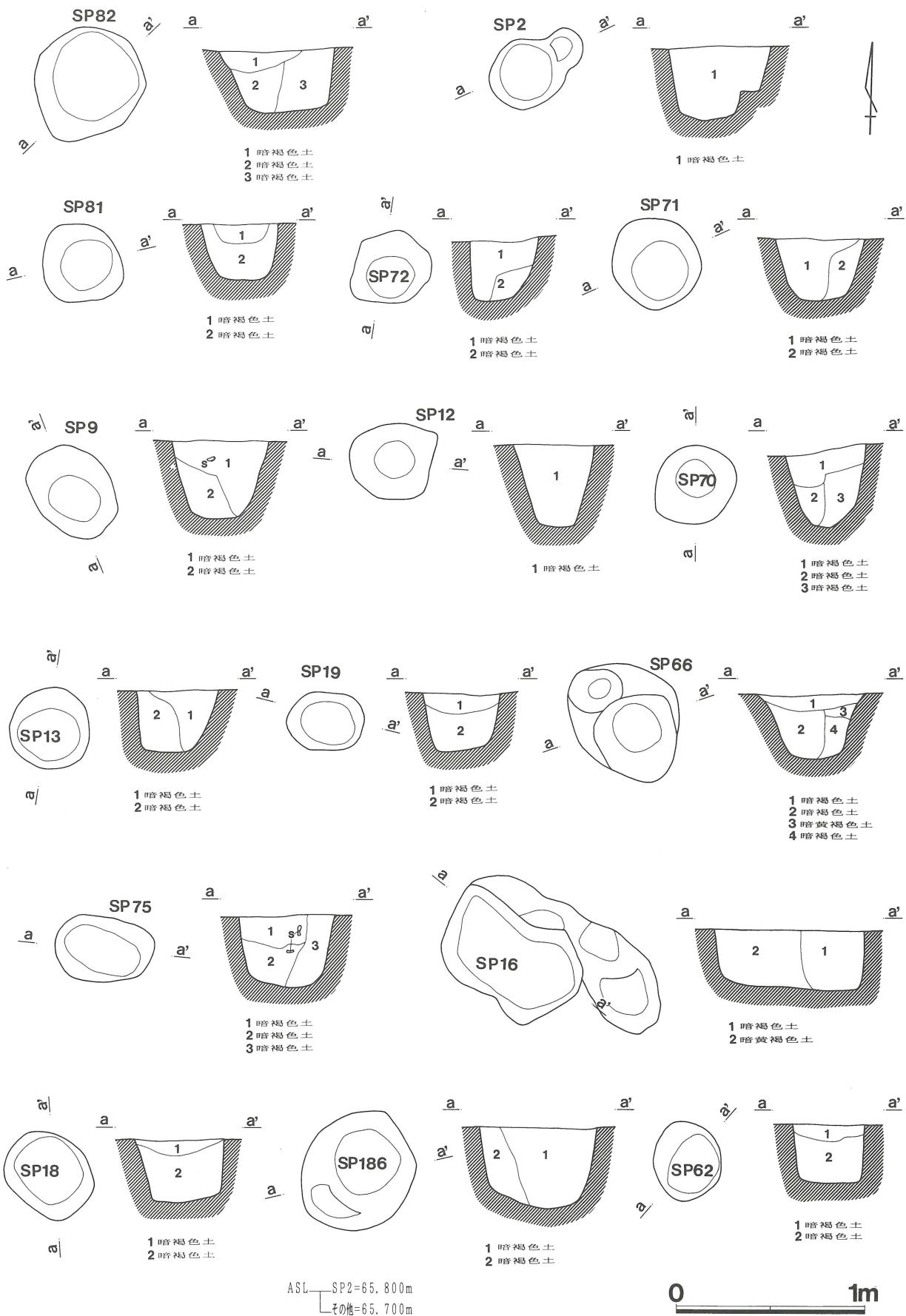
第8図 グループ2ピット平面実測図



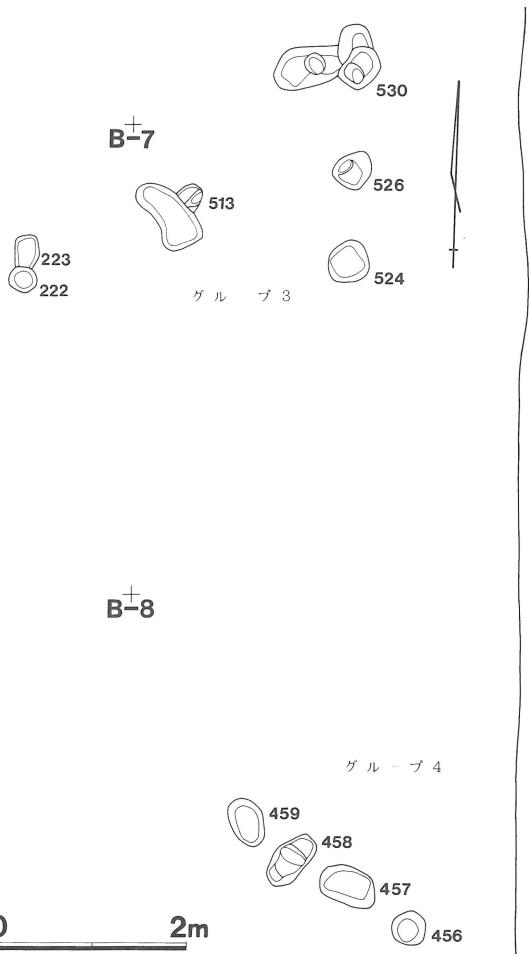
第9図 グループ1ピット実測図(1)



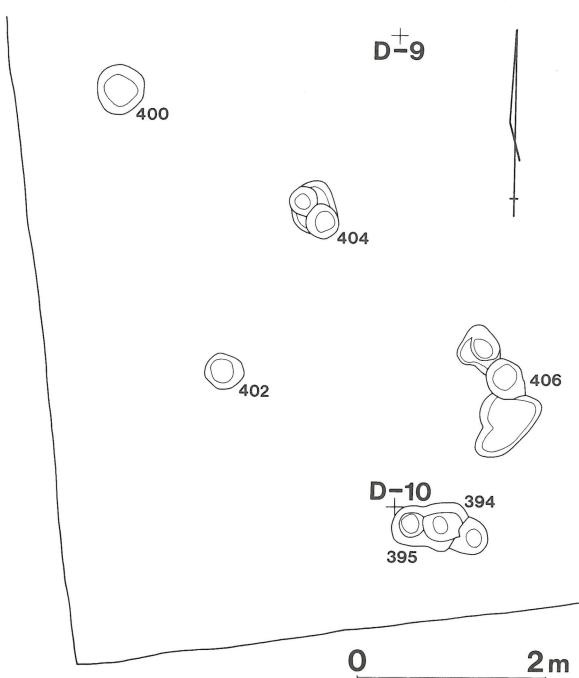
第10図 グループ1ピット実測図(2)



第11図 グループ2 ピット実測図



第12図 グループ3・4ピット平面実測図



第13図 グループ5ピット平面実測図

S F 10

C-12区で検出された。規模は、長径 1.36 m、短径 0.68 mを測り、長方形を呈する。土坑の東壁中央部分は S P 359 と切り合っている。確認面から底面までの深さ 0.2 mを測る。

S F 11

A-13区で検出された。規模は、長径 1.0 m、短径 0.84 mを測り、平面形は橢円形を呈する。この S F 11 は S P 308 に切られている。底面は中央部が最も深く、確認面から 0.42 mを測る。

S F 12

D-9区で検出された。規模は、長径 1.55 m、短径 0.76 mを測り、平面形は砲弾形を呈する。確認面から底面までの深さ 0.18 mを測る。

iii ピット (S P)

現地調査の時点では竪穴住居跡は検出されなかったが、ピットは疎密の差がみられるものの、南側調査区、北側調査区の全域から検出された。

このように発掘調査区の全域から検出されたピットであるが、まとまりをもったピット群として抽出できるものがあった。

抽出の根拠は、①遺物が集中して出土していること、②ピットの断面形が柱穴状をなすものが集中していること、③構築物が想定できるようなピットの配置であること、の 3 点である。

この 3 点のいずれかが該当するものをグループと考え、ここに報告する。

グループ1 (第7図・第9図・第10図)

C-1・2区、D-1・2区、E-1・2区で検出されたピットである。このグリッドの大部分のピットから縄文土器が出土している。

この大きくひとまとめにしたグループ1も、ピットの底面のレベルをもとに、さらに 4 つのグループに分けることが可能であると思われる。
 ① S P 190・195・192・194・196・198 の一群で、確認面からの深さ 0.19 ~ 0.391 m、標高 65.239 ~ 65.354 mを測るもの。

② S P 188・189・207・49・50・205・204・53の一群で、確認面からの深さ 0.337 ~ 0.539

m、標高 65.18 ~ 65.25 *m*を測るもの。

③ S P 199 • 24 • 201 • 202 • 26 • 27 • 28 • 203 の一群で、確認面からの深さ 0.338 ~ 0.456 *m*、標高 65.106 ~ 65.203 *m*を測るもの。

④ S P 30 • 215 • 31 • 213 • 32 • 216 • 217 • 218 • 214 • 33 の一群で、確認面からの深さ 0.354 ~ 0.501 *m*、標高 65.022 ~ 65.106 *m*を測るもの。

ピット内からの出土遺物は、S P 190 (21図-29)、191 (24図-4)、192 (23図-110)、196 (25図-7)、198 (25図-1)、199 (25図-6)、49 (21図-2、22図-52 • 70、23図-83)、50 (21図-9)、24 (21図-6、22図-58、23図-99)、53 (23図-75 • 76 • 85 • 94 • 97)、26 (21図-22、23図-96、24図-3、25図-9)、27 (22図-53)、31 (26図-14)、213 (23図-105)、211 (23図-95)、43 (21図-28)、216 (21図-15 • 20、26図-15)、217 (21図-3 • 27)、214 (22図-59) がある。

グループ2 (第8図・第11図)

A-1 • 2区、B-1 • 2区、C-1 • 2区で検出されたピットである。これらのピットのうち、B-2区に位置する S P 72 • 71 • 70 • 66 • 75 の底面のレベルは、標高 65.177 ~ 65.266 *m*と比較的一定している。S P 66からは、21図-48の土器が出土している。

グループ3 (第12図・第14図)

A-6 • 7区、B-7区で検出されたピットである。これらのピットのうち一直線に並ぶ S P 526 • 524 • 530 の底面は、確認面から約 0.2 *m*、標高 65.05 *m*内外と一定している。

S P 222 と 223 は切り合い関係にあり、S P 222 が 223 を切っているものと判断される。S P 222 内からは、21図-13 • 16 • 36、22図-62 • 63、25図-3 が出土している。

グループ4 (第12図・第14図)

A-8区で検出されたピットで、約 0.6 ~ 0.7 *m*の間隔をおいて一直線に並ぶ。

ピットの底面のレベルは、標高 64.807 ~ 64.942 *m*と一定している。また、S P 456 の 1層、457 の 1層、458 の 1層、459 の 1層中には粗い炭化粒が混じるという共通点を有する。

グループ5 (第13図・第14図)

S P 395 • 406 • 404 • 402 の配置は竪穴住居跡の主柱穴を思わせる。ピット間の距離は、S P 395 と 406 間、404 と 402 間が約 2 *m*、S P 395 と 402 間、406 と 404 間が約 2.5 *m*を測る。

グループ6 (第15図・第17図)

A-11 • 12区、B-11 • 12区、C-11 • 12区で検出されたピットである。

ピットは、B-12グリッドポイントの東に S P 387 • 386 • 385 • 329 • 541 が湾曲する形で並び、約 3 *m*西に S P 383 • 382 • 384 • 348 • 347 • 345 • 344 が一列に並ぶ。そして、約 3 *m*の間隔をおいて C-12グリッドポイントの西に S P 378 • 379 • 380 • 355 • 353 • 352 が並ぶ。

グループ7 (第16図・第18図)

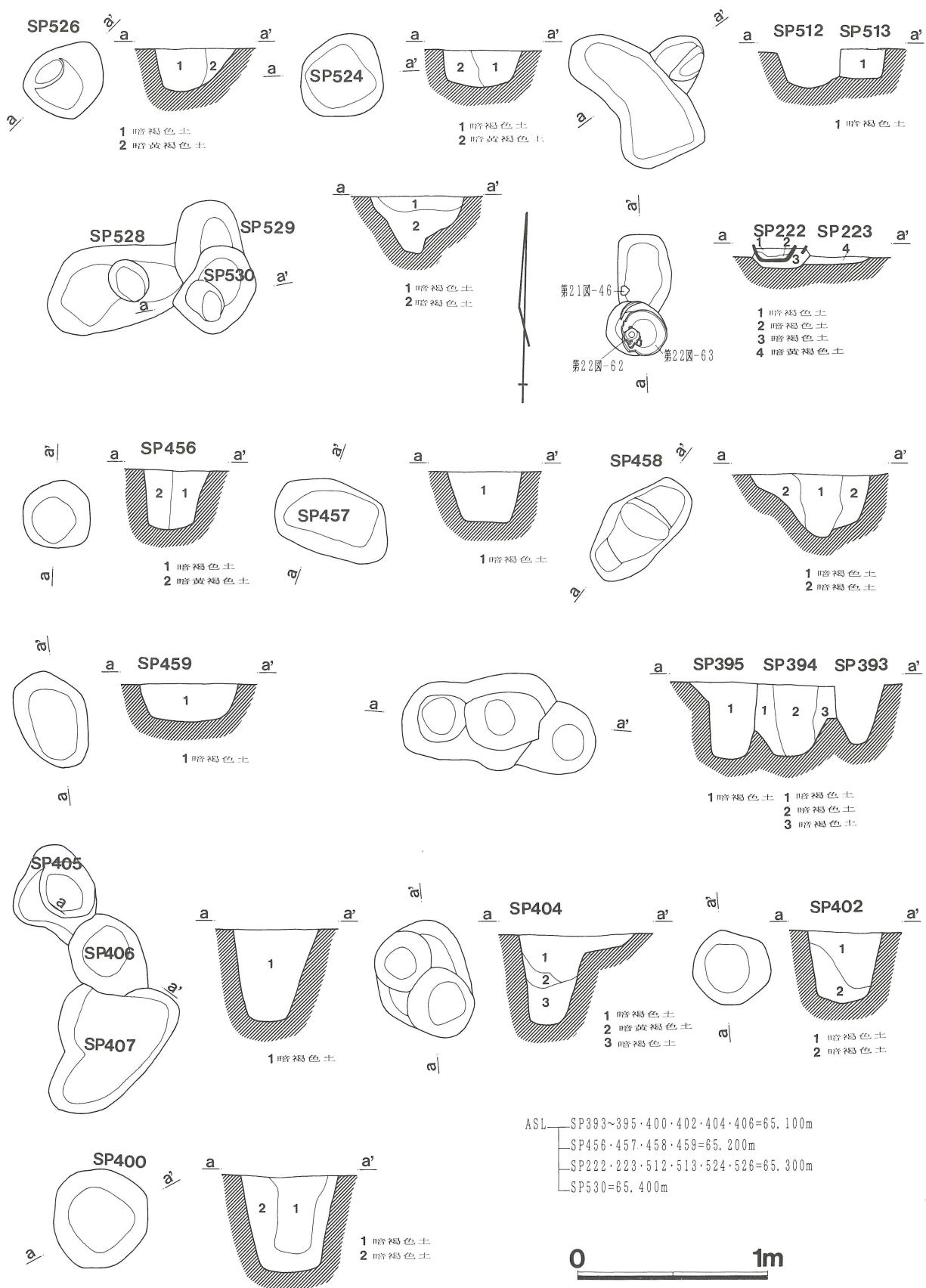
A-13 • 14区、B-13 • 14区で検出されたピットである。

S P 304 • 306 が確認面からの深さ 0.322 *m*、0.36 *m*と浅いほかは、確認面からの深さ 0.433 ~ 0.546 *m*と深いピットである。

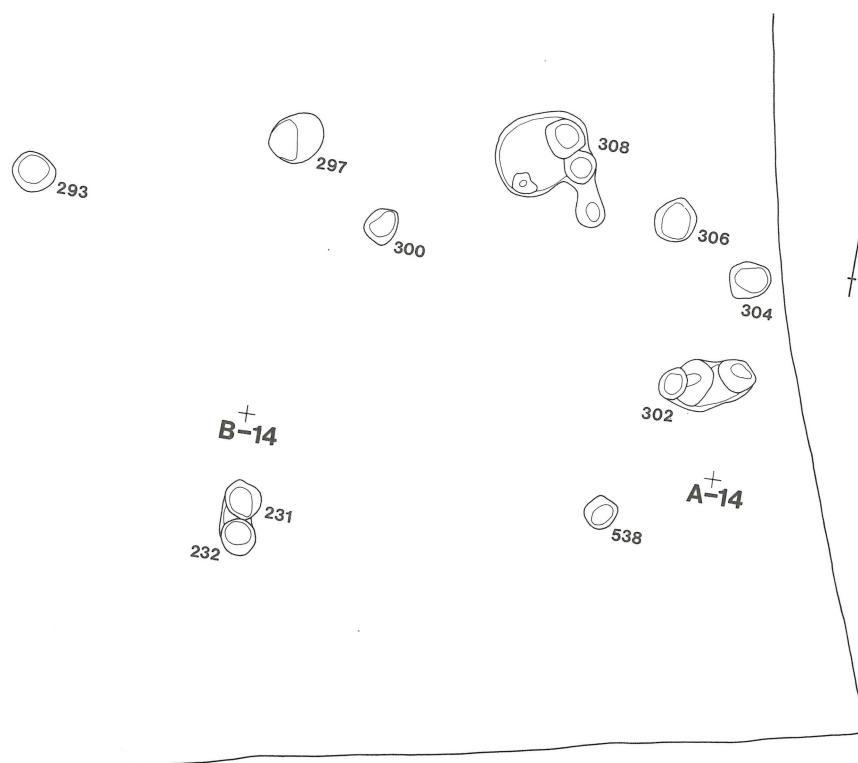
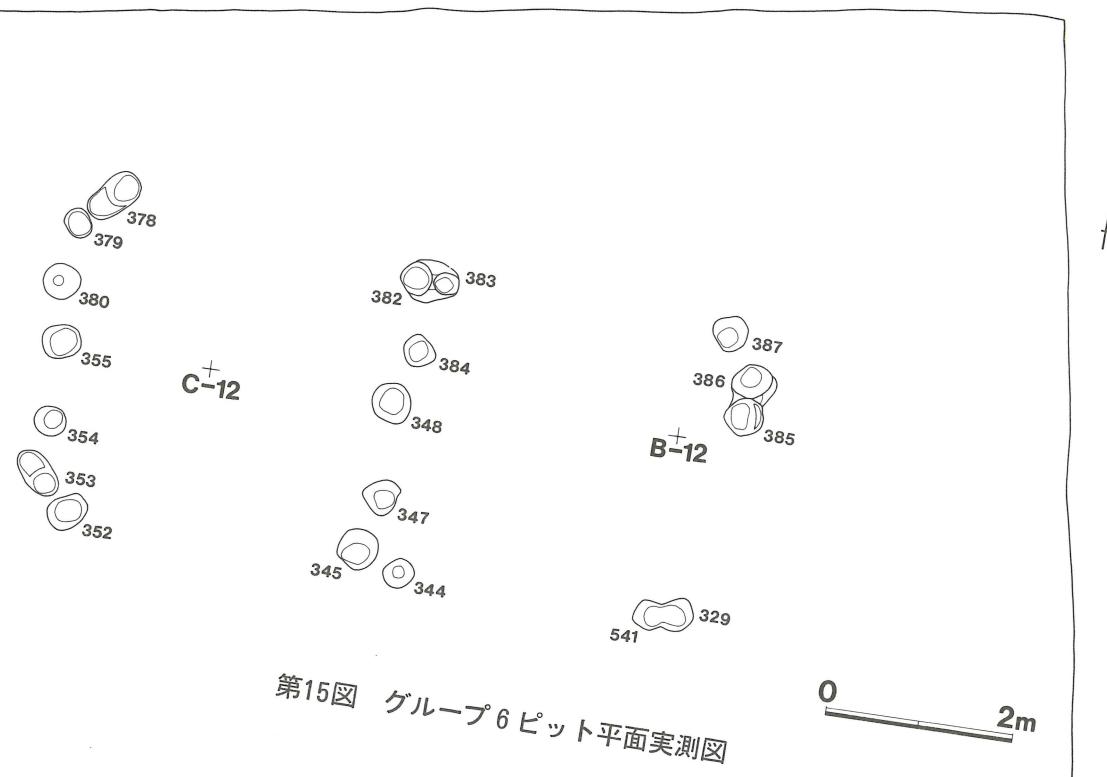
その他のピット (第19図・第20図)

調査区内から検出されたピットで、グループに属さないものの深く掘り込まれ柱穴状を呈するもの、遺物が集中して出土しているピットを、その他のピットとして報告する。

S P 143 からは21図-21 • 24 • 35、89からは22図-67 • 68 • 69、88からは23図-78と26図-10、271からは21図-18が出土している。

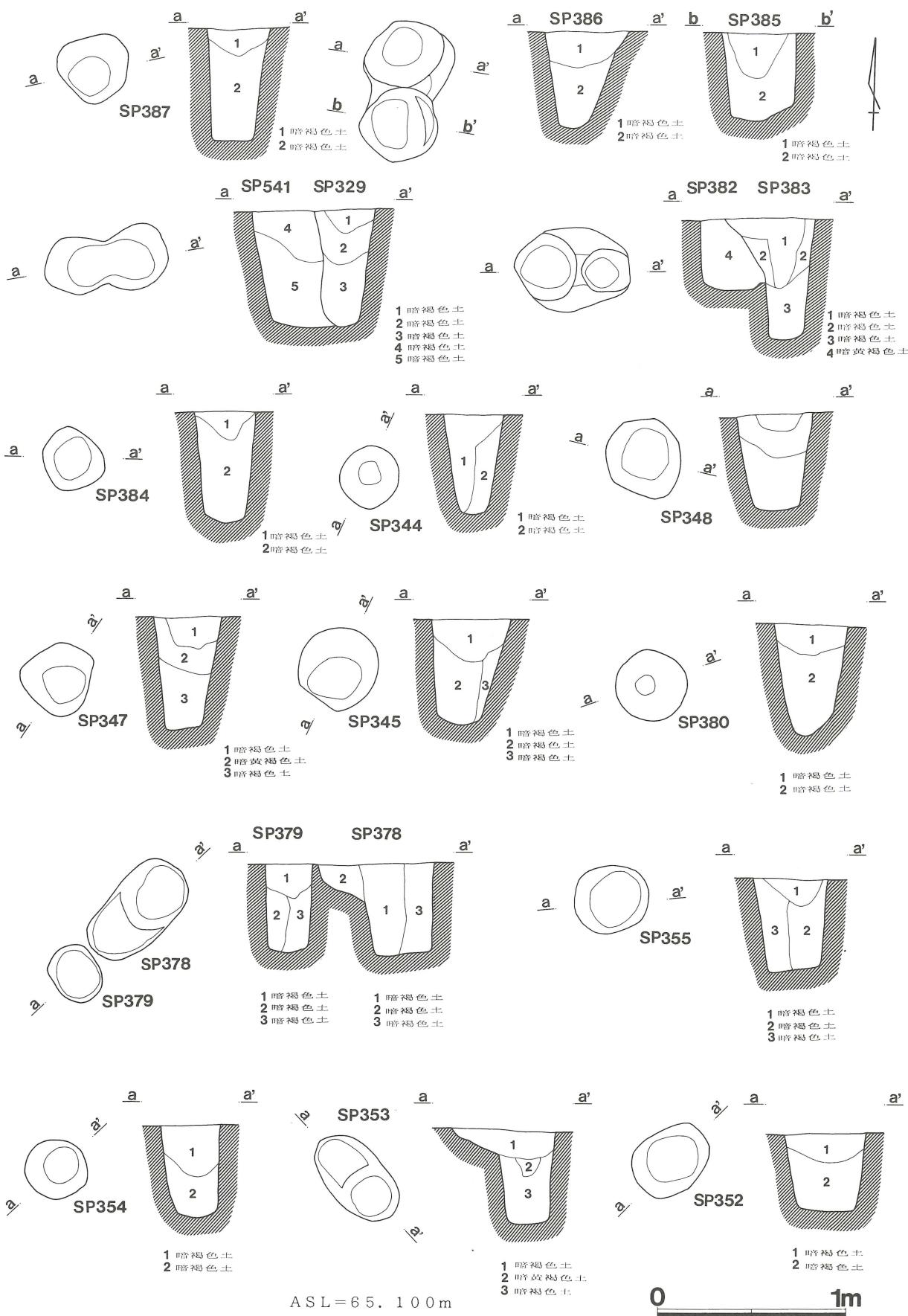


第14図 グループ3・4・5ピット実測図

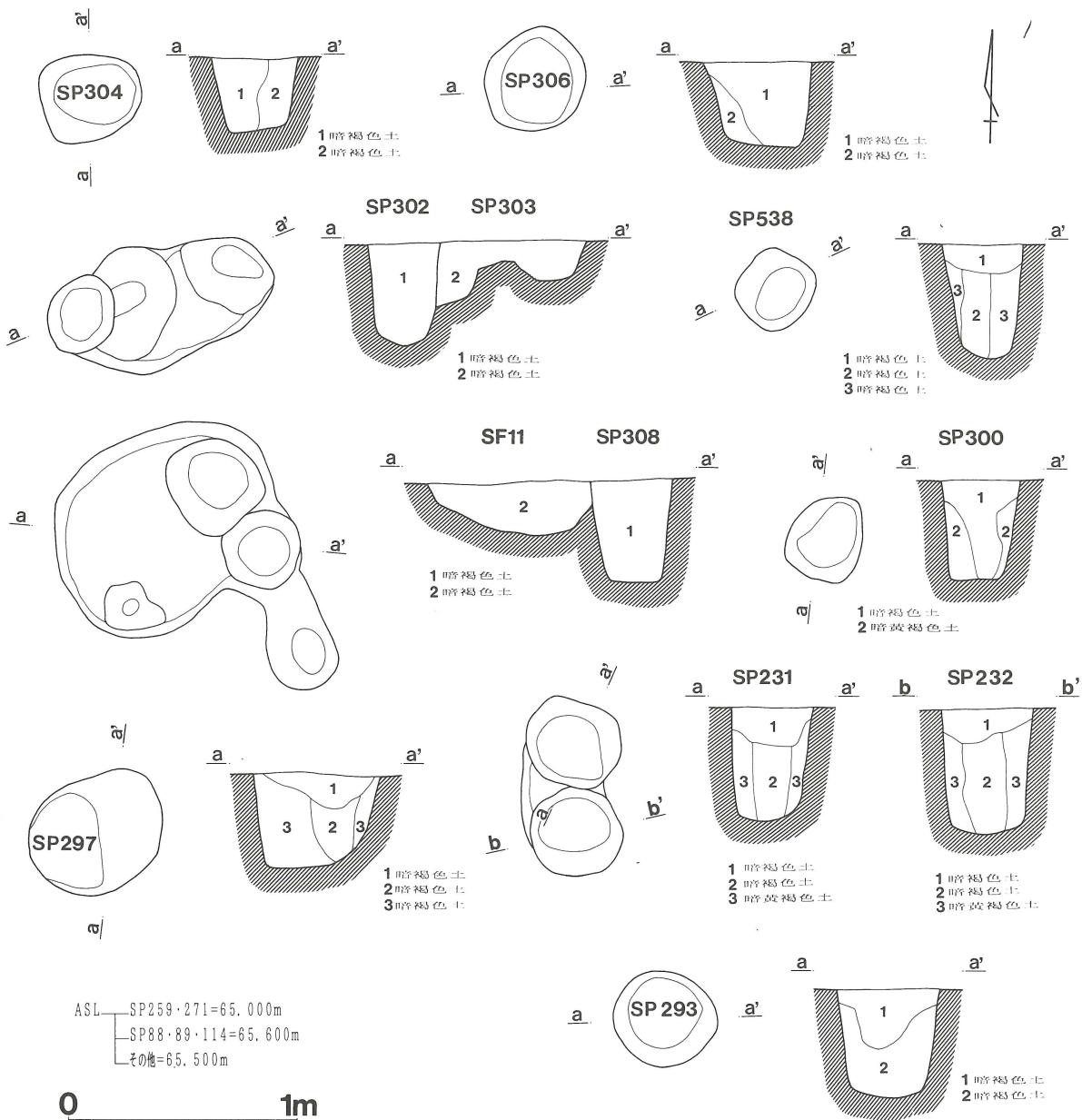


第16図 グループ7ピット平面実測図

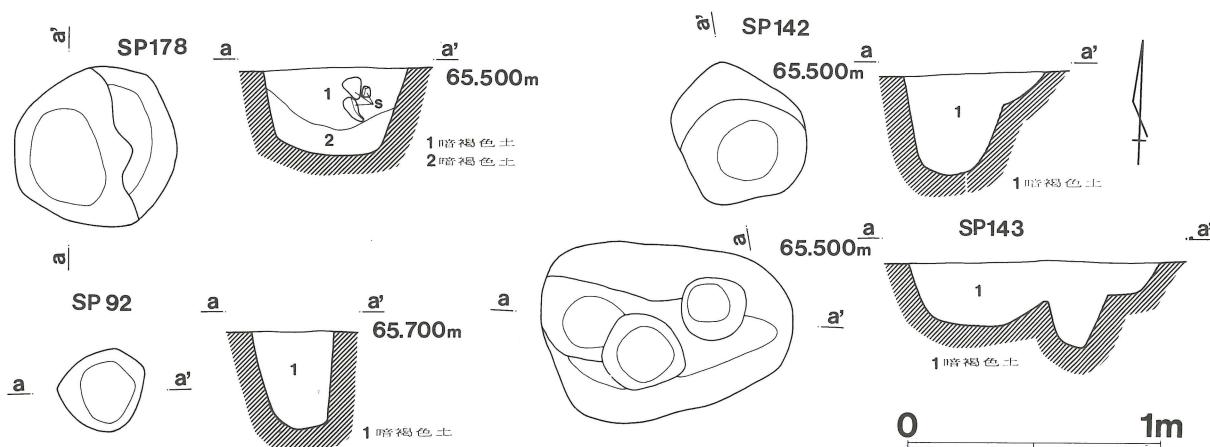
0 2m



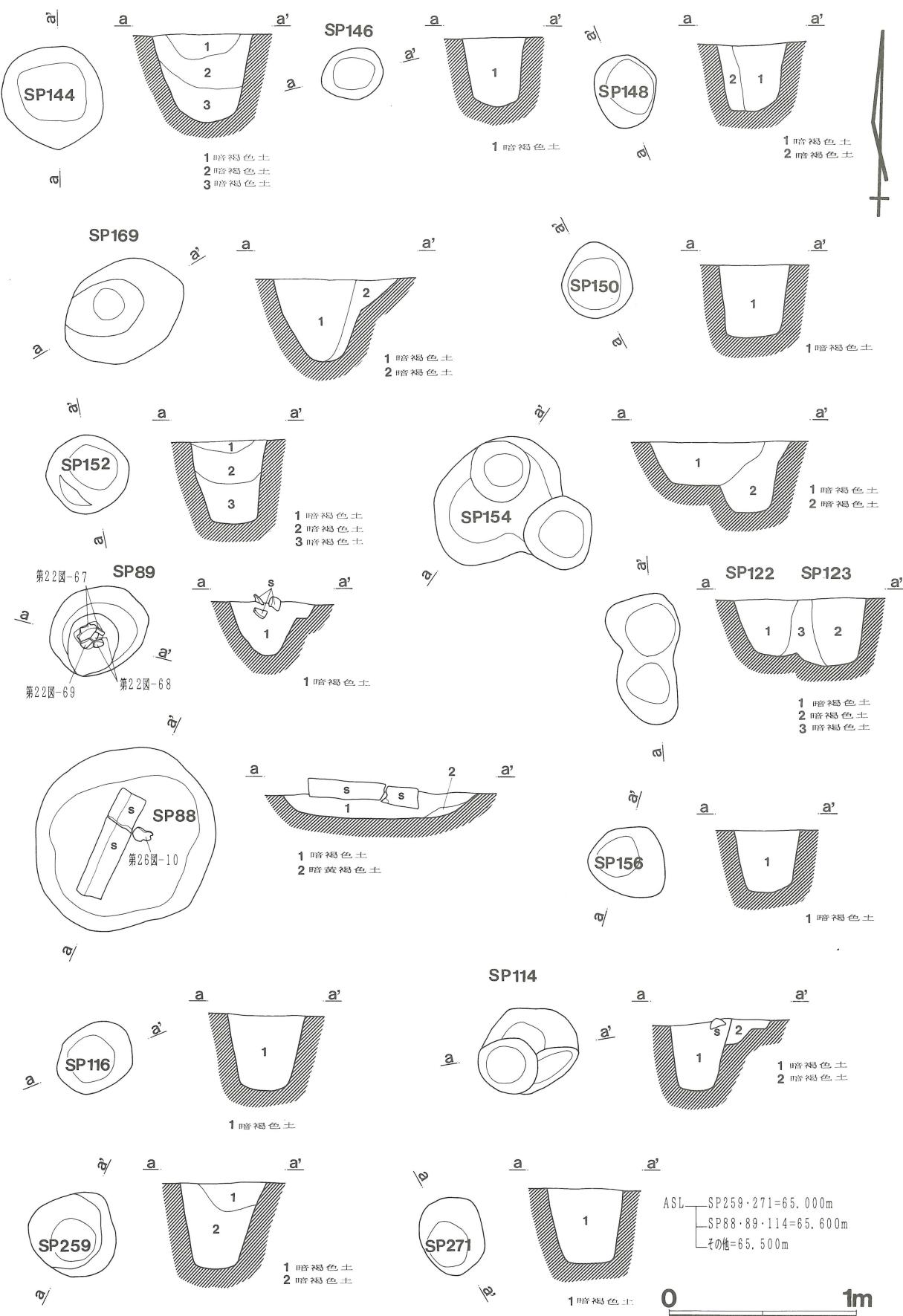
第17図 グループ6ピット実測図



第18図 グループ7ピット実測図



第19図 その他のピット実測図(1)



第20図 その他のピット実測図(2)

ピット計測表

(単位: m)

	No.	長径	短径	深さ	深さ(標高)
グ ル ル I ブ 1	190	0.4	0.31	0.311	65.25
	195	0.5	0.42	0.368	65.239
	188	0.39	0.37	0.407	65.194
	189	0.43	0.40	0.39	65.198
	191	0.49	0.40	0.36	65.186
	192	0.35	0.34	0.319	65.272
	194	0.65	0.46	0.317	65.275
	196	0.95	0.55	0.19	65.264
	207	0.40	0.39	0.539	65.213
	198	0.37	0.34	0.391	65.354
	199	0.75	0.48	0.456	65.106
	49	0.71	0.36	0.389	65.191
	50	0.53	0.45	0.392	65.25
	205	0.36	0.32	0.393	65.18
	24	0.64	0.55	0.409	65.155
	204	0.38	0.35	0.337	65.225
	53	0.45	0.43	0.337	65.207
	201	0.35	0.34	0.338	65.203
	202	0.42	0.42	0.404	65.146
	26	1.15	0.89	0.384	65.154
	27	0.93	0.62	0.341	65.144
	28	0.39	0.35	0.396	65.13
	203	0.39	0.35	0.413	65.123
	30	0.44	0.35	0.42	65.081
	215	0.45	0.39	0.354	65.129
	31	0.43	0.43	0.501	65.022
	213	0.40	0.35	0.412	65.097
	32	(0.57)	0.40	0.413	65.106
	212	(0.37)	0.32	0.342	65.171
	211	0.30	0.26	0.372	65.141
	43	0.82	0.60	0.457	65.051
	216	0.94	0.75	0.355	65.106
	217	0.47	0.24	0.378	65.095
	218	0.48	0.35	0.445	65.043
	214	0.60	0.43	0.449	65.041
	39	0.65	0.56	0.363	65.14
	33	0.52	0.44	0.363	65.028
	219	0.45	0.35	0.342	65.174
	37	0.40	0.37	0.121	65.381

	No.	長径	短径	深さ	深さ(標高)
グループ2	82	0.65	0.57	0.364	65.32
	2	0.55	0.32	0.38	65.307

※ ただし()は推定の長さ

(単位：m)

	No.	長 径	短 径	深 さ	深さ（標高）
グ ル 一 ブ 2	81	0.47	0.45	0.293	65.369
	72	0.42	0.38	0.317	65.265
	71	0.50	0.45	0.329	65.26
	9	0.53	0.42	0.402	65.232
	12	0.43	0.41	0.447	65.18
	70	0.46	0.41	0.44	65.177
	13	0.45	0.43	0.328	65.309
	19	0.42	0.31	0.242	65.389
	66	0.68	0.56	0.347	65.266
	75	0.53	0.35	0.385	65.232
	16	0.80	0.43	0.318	65.32
	18	0.50	0.41	0.325	65.298
	186	0.68	0.58	0.444	65.173
	62	0.40	0.38	0.305	65.316

	No.	長 径	短 径	深 さ	深さ（標高）
グ ル 一 ブ 3	526	0.42	0.37	0.215	65.047
	524	0.48	0.42	0.207	65.052
	530	0.46	0.45	0.217	65.049
	513	0.45	0.34	0.153	65.418
	223	(0.45)	0.28	0.035	65.194
	222	(0.31)	0.27	0.056	65.173

	No.	長 径	短 径	深 さ	深さ（標高）
グ ル 一 ブ 4	456	0.38	0.36	0.302	64.849
	457	0.63	0.38	0.289	64.861
	458	0.63	0.35	0.286	64.807
	459	0.52	0.36	0.20	64.942

	No.	長 径	短 径	深 さ	深さ（標高）
グ ル 一 ブ 5	394	0.51	(0.39)	0.313	64.659
	395	0.41	(0.34)	0.4	64.655
	406	(0.45)	0.38	0.48	64.573
	404	0.61	0.47	0.482	64.555
	402	0.42	0.37	0.376	64.681
	400	0.52	0.50	0.507	64.562

	No.	長 径	短 径	深 さ	深さ（標高）
グ ル 一 ブ 6	387	0.37	0.36	0.596	64.474
	386	0.46	0.35	0.531	64.548
	385	0.41	0.39	0.475	64.589
	329	0.34	0.27	0.635	64.419
	541	(0.40)	0.29	0.616	64.414
	383	0.25	0.27	0.643	64.368
	384	0.34	0.32	0.596	64.413
	344	0.33	0.31	0.53	64.463

※ ただし()は推定の長さ

(単位: m)

	No.	長 径	短 径	深 さ	深さ(標高)
グ ル ー ブ 6	382	0.34	0.32	0.381	64.618
	348	0.44	0.40	0.513	64.491
	347	0.39	0.32	0.594	64.41
	345	0.45	0.42	0.563	64.431
	378	0.62	0.33	0.478	64.496
	379	0.32	0.26	0.467	64.497
	380	0.39	0.39	0.535	64.384
	355	0.40	0.36	0.486	64.485
	354	0.34	0.32	0.493	64.481
	353	0.29	0.25	0.494	64.454
	352	0.42	0.34	0.429	64.522

	No.	長 径	短 径	深 さ	深さ(標高)
グ ル ー ブ 7	304	0.44	0.37	0.322	64.772
	306	0.43	0.44	0.360	64.713
	302	0.33	0.3	0.433	64.638
	538	0.35	0.31	0.495	64.588
	308	0.35	0.34	0.451	64.603
	300	0.38	0.33	0.454	64.589
	297	0.57	0.51	0.488	64.566
	231	0.43	0.41	0.465	64.558
	232	0.40	0.38	0.546	64.508
	293	0.45	0.41	0.477	64.556

	No.	長 径	短 径	深 さ	深さ(標高)
そ の 他 の ピ ッ ト	178	0.64	0.62	0.349	65.121
	92	0.34	0.31	0.388	65.232
	142	0.57	0.49	0.412	65.051
	144	0.55	0.53	0.473	64.991
	143	1.0	0.60	0.329	65.066
	146	0.34	0.27	0.369	65.075
	169	0.69	0.50	0.435	64.913
	148	0.37	0.33	0.367	65.045
	150	0.41	0.38	0.392	65.034
	152	0.45	0.41	0.452	64.942
	154	0.74	0.47	0.382	65.007
	89	0.5	0.47	0.124	65.243
	123	(0.40)	0.33	0.353	65.087
	122	(0.32)	0.31	0.301	65.14
	156	0.43	0.36	0.332	65.08
	88	1.05	0.93	0.14	65.37
	116	0.43	0.34	0.4	65.02
	114	0.56	0.45	0.359	65.116
	259	0.48	0.45	0.466	64.464
	271	(0.41)	0.34	0.394	64.498

※ ただし () は推定の長さ

2. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、すべて縄文時代中期に属するもので、他の時代に属する遺物は出土していない。遺物の出土量は、大きな遺構が検出しなかったこと等から多くなくポリコンテナ4箱程度であった。

出土した個々の土器を観察すると、時期のわかる土器でも器形全体のわかる土器はなく、そのほとんどが小破片であった（第21図～第23図）。これらの土器破片は、中部・関東地方、関西・瀬戸内地方、遠江地方（在地）の三地域の特色をもつものであった。この状況は、これまでの調査と同じである。

その他の遺物としては、土製品（第24図）と石器（第25～26図）があげられる。土製品は土製円板のみ出土しているが、今回の調査での出土量はこれまでの調査での出土量に比べると多く、全部で6個である。石器は少なく、石錐8個、石匙2、打製石斧3、石皿2、磨石2である。

次に、個々の遺物について説明を加えていくことにする。

先にも述べたとおり今回の調査で得た土器は、これまでの調査で得た土器の内容とほとんど変わりがなく、すべて縄文時代中期におさまるものである。したがって土器の分類も前の報告書に従うこととする。

i 土 器（第21～23図）

I群土器：関東・中部地方に型式名を求める事のできる（系統付けられる）土器群。

a類土器：五領ヶ台式に比定される土器群。ただし、前回同様ここに紹介するものは、関東地方で確認できるものを直接置き替える事のできない、言い換えれば東海的な五領ヶ台式土器である。また、時期に関しても新しい時期に偏りがみられる。

b類土器：阿玉台式に比定される土器群。a類同様関東地方色を逸脱したものが多く含まれる。

今回紹介するものは、西村氏の分類によるⅢ式に属するものと考えている。

c類土器：勝坂式に比定される土器群。前回同様勝坂Ⅱ式に比定されるものが中心で、中には古い様相をもつもの・新しい様相をもつものが含まれる。

d類土器：曾利式に比定される土器群。今回の調査では出土していない。今回の調査地点が、曾利式期の集落の外側にあたるためと考える。

II群土器：関西・瀬戸内地方に型式名を求める事のできる土器群。

a類土器：船元式に比定される土器群。今回紹介する土器群も前回同様Ⅱ式・Ⅲ式のものに属す。

b類土器：里木式に比定される土器群。今回紹介する土器群も前回同様里木Ⅱ式のものと思われる。

III群土器：他地域に型式名を求める事のできない土器群で、言い換えれば在地的・東海的な土器群である。

a類土器：袋井市大畑遺跡出土の大畑C2式に系統付けられる土器群である。今回紹介する土器も前回同様大畑遺跡出土の土器そのものでないが、胎土・原体・施文法・文様等において共通する特長をもつ。時間的な位置付けは、前回示したとおり大畑C2式に後続する

ものと考えている。

b 類土器：いわゆる北屋敷土器に属する土器群である。北屋敷式土器の実態が明らかとなっていない今、本報での細分はさけることとする。

上記分類に従い、以下に個々の土器を説明する。

I 群 a 類土器に属するものとして、第21図1・2がある。1はS P 223出土の土器で深鉢形土器の口縁部破片で、2はS P 49出土の深鉢形土器の胴部破片である。いづれもこげ茶色の土器で、半截竹管状工具による刺突と平行沈線が施される。

I 群 b 類土器に属するものとして、第23図109がある。S P 45から出土した土器で、赤褐色の深鉢形土器の胴部破片である。胎土に金雲母・砂粒を含み、半截竹管状工具外皮面による波状沈線がみられる。

I 群 c 類土器に属するものとして、第22図61～第23図108・110があげられる。他と比べてもわかるように、今回の調査で最も多くの出土量をみた土器群である。61は、半円と三角形の組合せをモチーフとした文様をもつ深鉢形土器の口縁部破片で、半截竹管状工具による三角押文が隆帯を縁取り、その中央に玉抱き三叉文に似た文様が施される。そして、隆帯の縁に半截竹管状工具により刺突が認められる。62と63は、S P 222から重なって出土した土器（第14図）で、同一固体と考えられる。62は把手で、63は深鉢形土器の底部破片である。62には、隆帯上に半截竹管状工具の外皮面と内皮面を使用した刺突がみられ、竹管状工具による円形刺突と玉抱き三叉文が施される。64は、深鉢形土器の口縁部破片でその把手の部分にあたる。65は、深鉢形土器の口縁部破片で、半截竹管状工具による隆帯縁取りと隆帯上にその外皮面使用の交互刻みが認められる。66は、半截竹管状工具外皮面使用による押引き文（キャタピラ文）が認められる。67-aと67-bと68はそれぞれ接合する土器で、69もこれらと同一の土器である。67-aと67-bは口縁部破片、68と69は頸部破片である。施文の工具はすべて半截竹管状工具で、隆帯縁取りにキャタピラ文、隆帯上に刻み、区画文の中に三角押文と三角形の印刻文が認められる。そして、頸部から胴部にかけ平行沈線が施されている。70～85は、いづれも隆帯上に半截竹管状工具により平行の刻み、あるいは外皮面使用による交互刻みが認められる土器である。そして、その多くが隆帯の縁取りとして半截竹管状工具の外皮面使用による沈線が施される。86～90は、隆帯の縁取りに半截竹管状工具による三角押文が施される土器である。87には、この他半截竹管状工具による平行沈線が施され、88～90にはキャタピラ文が認められる。91～99と101・107・110は、半截竹管状工具を使用し隆帯縁取りの沈線、平行沈線、キャタピラ文などを表出した土器である。100・103～105は無文の土器で、102と108は縄文施文の土器である。106は、S P 56から出土した深鉢形土器の底部破片で、底部直上に竹管状工具の沈線が認められる。以上述べた土器は、67～69がS P 89、70がS P 49、71がS P 52、72がS P 36、75・76がS P 53、77がS P 153、78がS P 88、79・80がS P 34、81がS P 17、82がC-12区、83がS P 49、84がS P 42、85がS P 53、86がB-12区、87がS P 40、88がS P 22、89がD-7区、90がS P 34、91がA-11区、92がA-13区、93がS P 42、94がS P 53、95がS P 211、96がS P 26、97がS P 53、98がS P 153、99がS P 24、100がS P 8、101がS P 153、102がD-2区、105がS P 213、106がS P 56、110がS P 192、それぞれからの出土である。勝坂式土器は、胎土に砂粒を多く含むことから、器面がザラザラしたものが多く、色調は赤褐色や赤黄褐色あるいは暗褐色したものが多い。そして、器厚が他の土器群に比べて厚い等の特長をもつ。

II 群 a 類土器に属するものとして、第21図26～48がある。これらの土器は、胎土が非常に特徴的で色

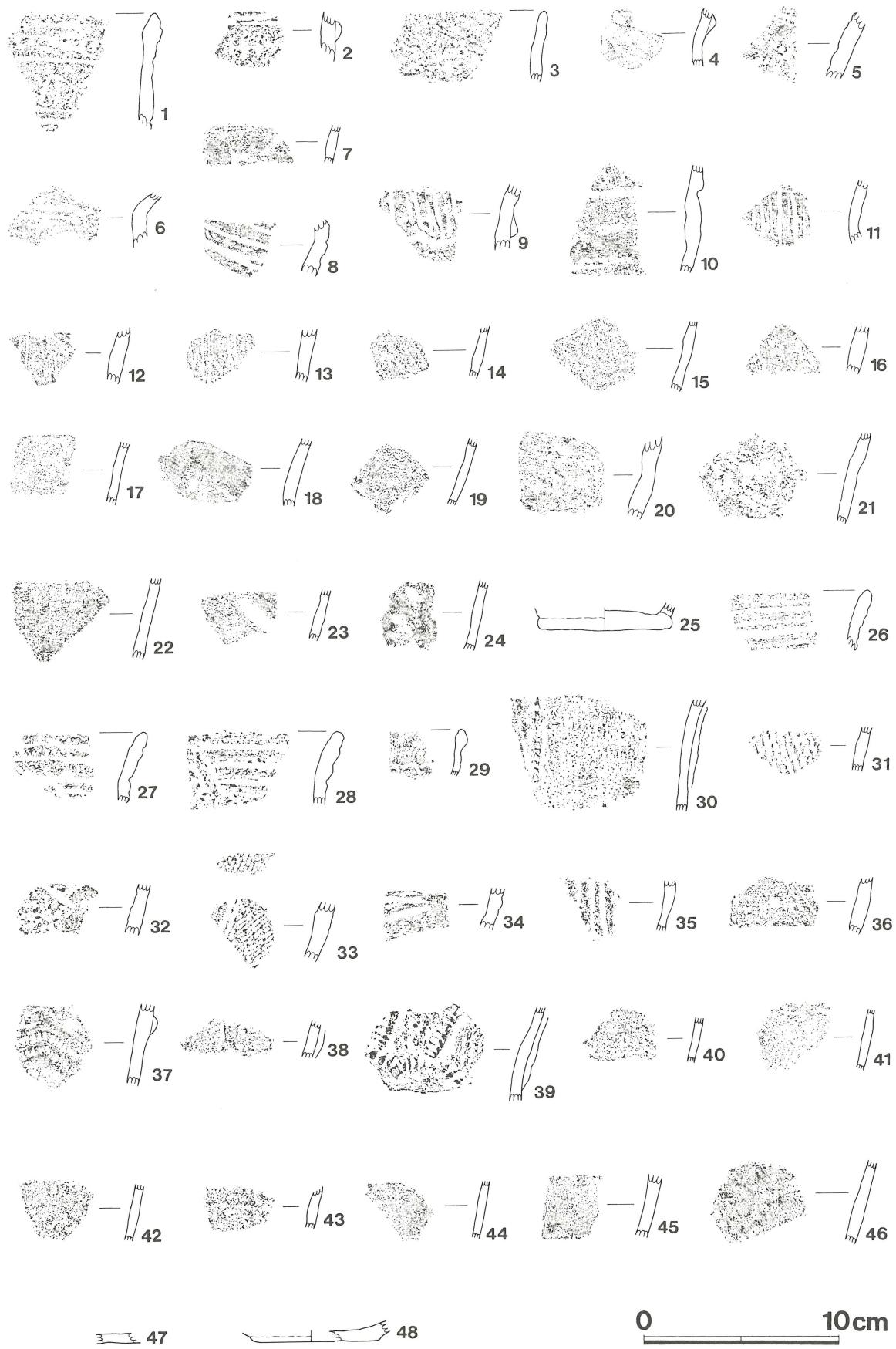
調が黄褐色あるいは赤黄褐色でまれに暗褐色のものが含まれる。そして胎土に長石・石英・砂粒が多く含まれ、焼成が良く堅い。26～29は、深鉢形土器の口縁部破片で、半截竹管状工具による平行沈線文が認められ、29には爪形文と刺突文が認められる。26はS P 186、27がS P 217、28がS P 43、29がS P 190それぞれからの出土である。30から46までが深鉢形土器の胴部破片で、30の隆帯上には半截竹管状工具による刻みが認められ、30～33の器面には縄文のような施文が認められる。33～36は、半截竹管状工具による平行沈線文が認められる土器で、37～39にはキャタピラ文が認められる。30はB—13区、31がC—12区、32がD—14区、33がS P 210、34がS P 427、35がS P 143、36がS P 222、37がS P 25、38がB—1区、39がS P 36、それぞれからの出土である。40～46は、深鉢形土器の胴部破片で無文の土器である。40がS P 25、41がS P 48、42がS P 25、43がB—9区、44・45がS P 25、46がS P 222からの出土である。47・48は底部破片で、器厚の薄い土器である。47がS P 48、48がS P 66からの出土である。

Ⅱ群 b 類土器に属するものとして、第22図56～60がある。いずれも黄褐色をした土器で、胎土に長石・石英・金雲母・砂粒を含む。56～58が深鉢形土器の口縁部破片で、59・60が胴部破片である。器面には、半截竹管状工具内皮面による平行沈線文が連弧状に描かれている。56がS P 25、57がS P 48、58がS P 24、59がS P 214、60がD—14からの出土した土器である。

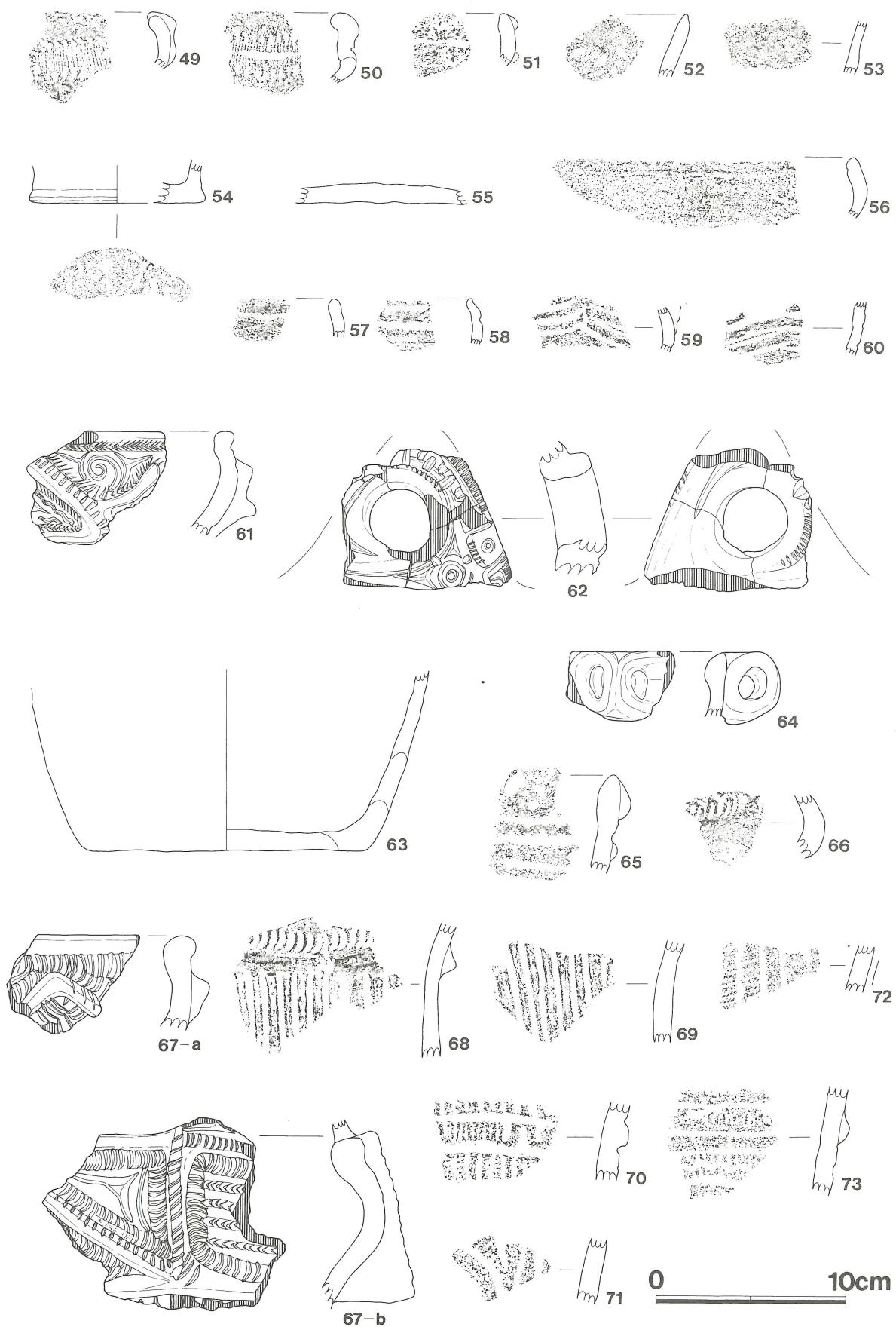
Ⅲ群 a 類土器に属するものとして、第21図3～25がある。3・4が深鉢形土器の口縁部破片、5～24が胴部破片、25が底部破片である。この群の土器は薄手で、胎土に金雲母・長石・石英・砂粒を含んでいる。3・4および14～24は無文の土器で、5～13の土器には半截竹管状工具による平行沈線が施されている。9～11には、前垂れ状の粘土貼り付けが認められる。工具の使用における特徴は、半截竹管状工具の内皮面の使用にあると思われる。これらの土器は、3がS P 217、4がS P 270、5がS P 206、6がS P 24、7がS P 408、8がS P 20、9がS P 50、10がS P 35、11がS P 36、12がS P 237、13がS P 222、14がS P 52、15がS P 216、16がS P 222、17がS P 438、18がS P 271、19がD—14区、20がS P 216、21がS P 143、22がS P 26、26がS P 143、25がS P 45から出土したものである。

Ⅲ群 b 類土器に属するものとして、第22図49～55がある。ここに属される土器の胎土の色調はその多くが暗褐色を呈しており、胎土中には石英・長石・金雲母・砂粒が含まれている。器厚は、薄いのが特徴である。49～51は深鉢形土器の口縁部破片で、52は波状口縁の突出部である。49・50にはヘラ状工具による押引き文（キャタピラ文に似る）が丁寧に施されており、さらに50には一筋の印刻が認められる。51には49・50のような押引き文は認められないが、微隆帯による三角形の区画文が施されている。53は、深鉢形の胴部破片で、無文の土器である。54・55は深鉢形土器の底部破片で、比較的薄手に作られている。54の底面には木葉痕が認められる。これらの土器は、51がS P 25から、52がS P 49、53がS P 27、54がS P 237、からの出土土器である。

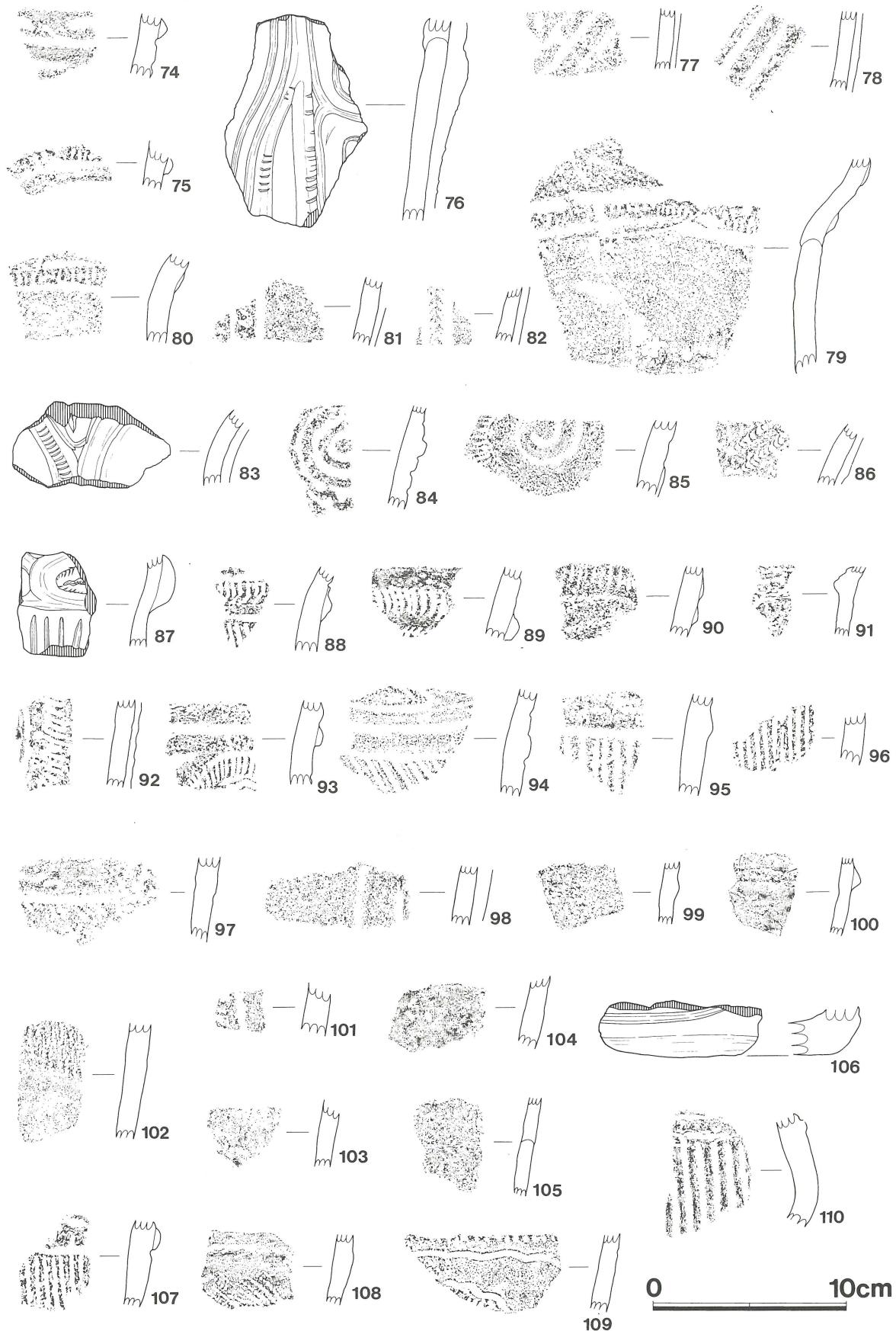
以上が今回の調査で出土した土器である。図示に耐え得ないものについて割愛したために、紹介した資料数が少ないように思えるところであるが、全体量が少ないのでご容赦願いたい。しかし、遺跡の内容を紹介するに差し障りのないものと判断している。



第21図 出土土器(1)



第22図 出土土器(2)



第23図 出土土器(3)

ii その他の遺物（第24～26図）

今回の調査で得た土器以外の出土遺物は、土製品の土製円板と、石器の石錘・石匙・打製石斧・石皿・磨石がある。この項では、これらについて挿図に従い説明を加えていくこととする。

土製品1（第24図1）は、器面に縄文が施された土器の破片により作られた土製円板で、3.8cmの大きさと1.0cmの厚さを測る。

土製品2（第24図2）は、器面が無文の土器破片により作られた土製円板で、3.6cmの大きさと0.8cmの厚さを測る。D-7区からの出土である。

土製品3（第24図3）は、器面が無文の土器破片により作られた土製円板で、3.8cmの大きさと0.9cmの厚さを測る。S P 26からの出土である。

土製品4（第24図4）は、器面が無文の土器破片により作られた土製円板で、2.5cmの大きさと0.8cmの厚さを測る。S P 191からの出土である。

土製品5（第24図5）は、器面に縄文が施された土器の破片により作られた土製円板で、2.9cmの大きさと0.8cmの厚さを測る。S P 17からの出土である。

土製品6（第24図6）は、土器の底部破片で作られた土製円板で、器面に木葉痕が認められる。6.1cmの大きさと1.5cmの厚さを測る。D-11区からの出土である。

これら土製円板は、大きさから三分類されるように思われる。つまり、1～3と4・5と6の三分類である。

石器1（第25図1）は、最大長4.2cm最大幅4.0cm厚さ1.3cmを測る石錘である。S P 198からの出土である。

石器2（第25図2）は、最大長4.0cm最大幅3.9cm厚さ0.8cmを測る石錘である。A-11区からの出土である。

石器3（第25図3）は、最大長4.8cm最大幅4.6cm厚さ1.1cmを測る石錘である。S P 222からの出土である。

石器4（第25図4）は、最大長4.3cm最大幅3.7cm厚さ0.9cmを測る石錘である。C-1区からの出土である。

石器5（第25図5）は、最大長3.8cm最大幅3.2cm厚さ0.9cmを測る石錘である。S P 11からの出土である。

石器6（第25図6）は、最大長4.4cm最大幅3.4cm厚さ1.1cmを測る石錘である。S P 199からの出土である。

石器7（第25図7）は、最大長4.6cm最大幅3.2cm厚さ1.0cmを測る石錘である。S P 196からの出土である。

石器8（第25図8）は、最大長4.8cm最大幅3.4cm厚さ0.9cmを測る石錘である。S P 52からの出土である。

石器9（第25図9）は、泥岩質の石材使用による横型石匙である。刃部を欠損しており長さが不明である。幅2.5cm厚さ0.8cmを測る大きさである。S P 26からの出土である。

石器10（第26図10）は、泥岩質の石材使用による横型石匙である。長さ9.5cm幅7.3cm厚さ1.2cmを測る大きさである。S P 88からの出土である。

石器11（第26図11）は、砂岩質の石材使用による揆型打製石斧である。最大長10.8cm最大幅5.4cm厚さ1.3cmを測る大きさである。

石器12（第26図12）は、泥岩質の石材使用による短冊型打製石斧である。最大長 11.9 cm 最大幅 4.3 cm 厚さ 2.3 cm を測る大きさである。

石器13（第26図13）は、安山岩質の石材使用による短冊型打製石斧である。最大長 11.8 cm 最大幅 5.1 cm 厚さ 2.5 cm を測る大きさである。C—2区からの出土である。

打製石斧は、いづれも刃部に使用痕が認められる。

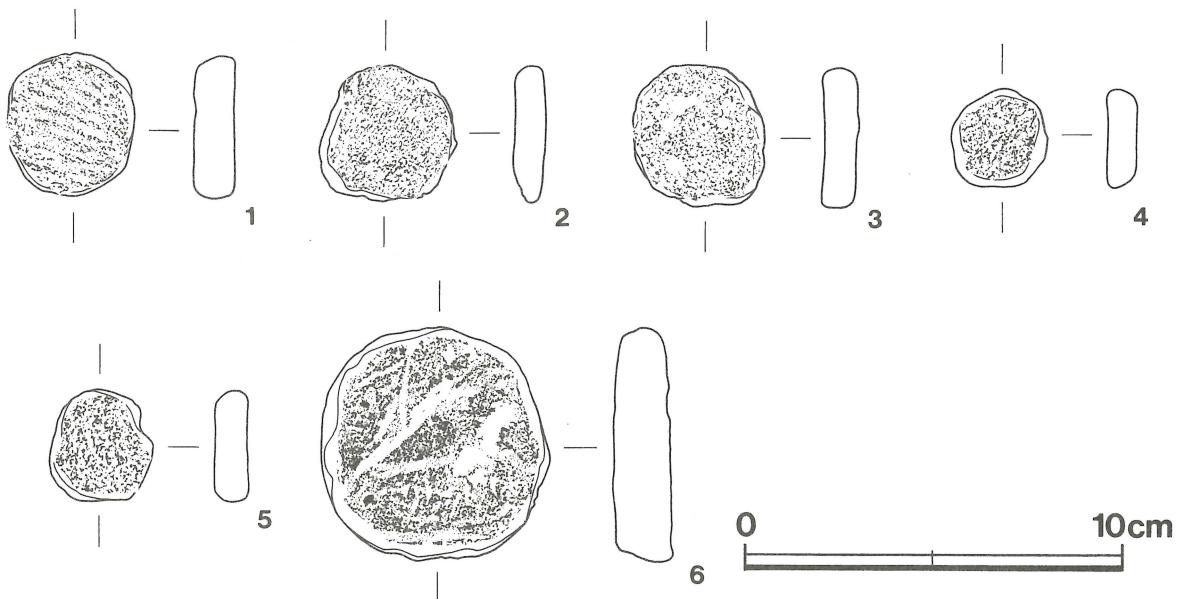
石器14（第26図14）・石器15（第26図15）は、いづれも砂岩の石皿破片で、上面を良く使用している。

石器16（第26図16）・石器17（第26図17）は、いづれも砂岩の磨石で、両面を良く使用している。

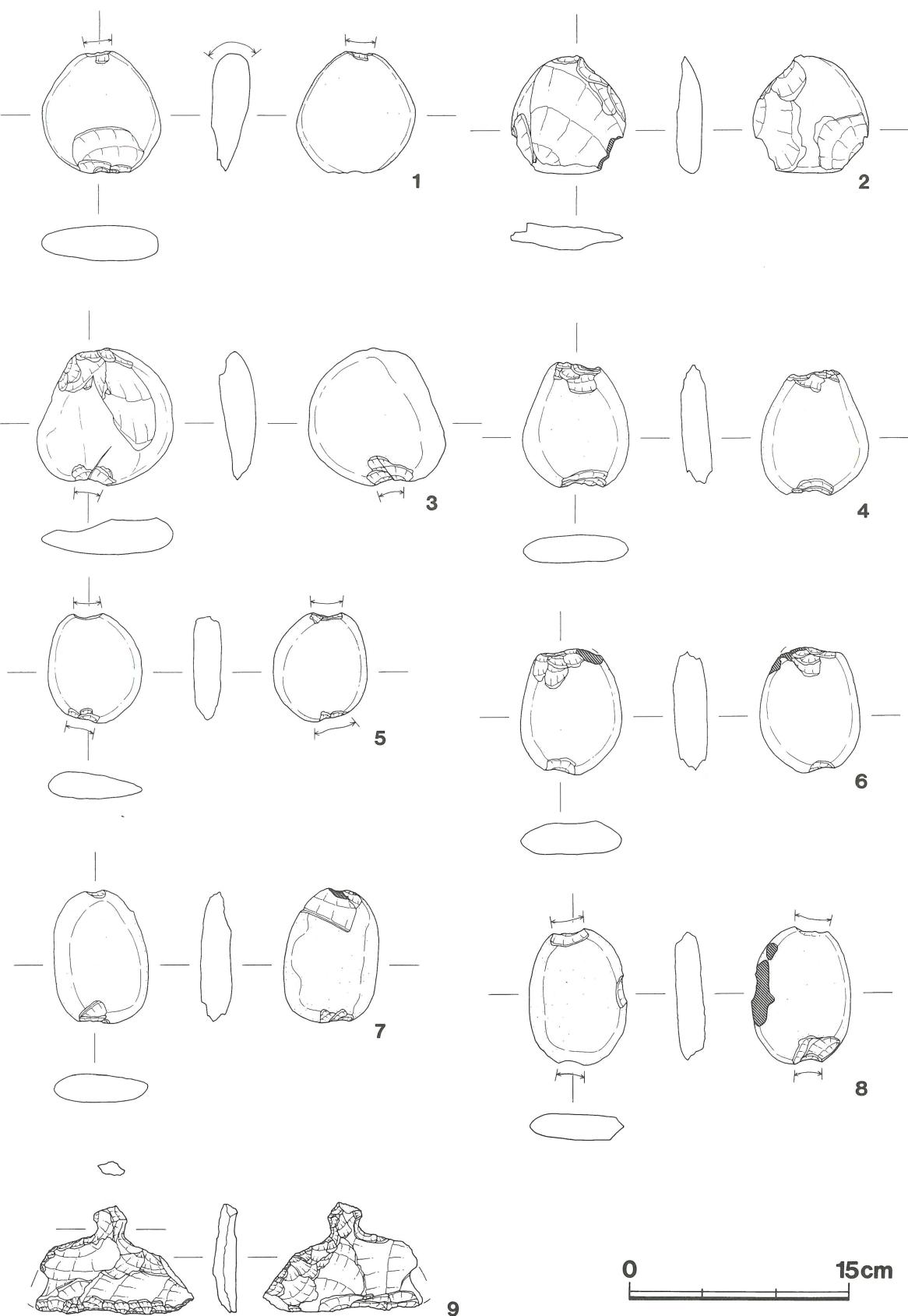
以上が今回の調査により得た土製品ならびに石器類である。土器とともに遺構から出土したものが少ないことから、これらの使用時期について詳しくないが、形状その他の特徴から縄文時代中期の所産としてさしつかえないものと考えている。

（参考文献）

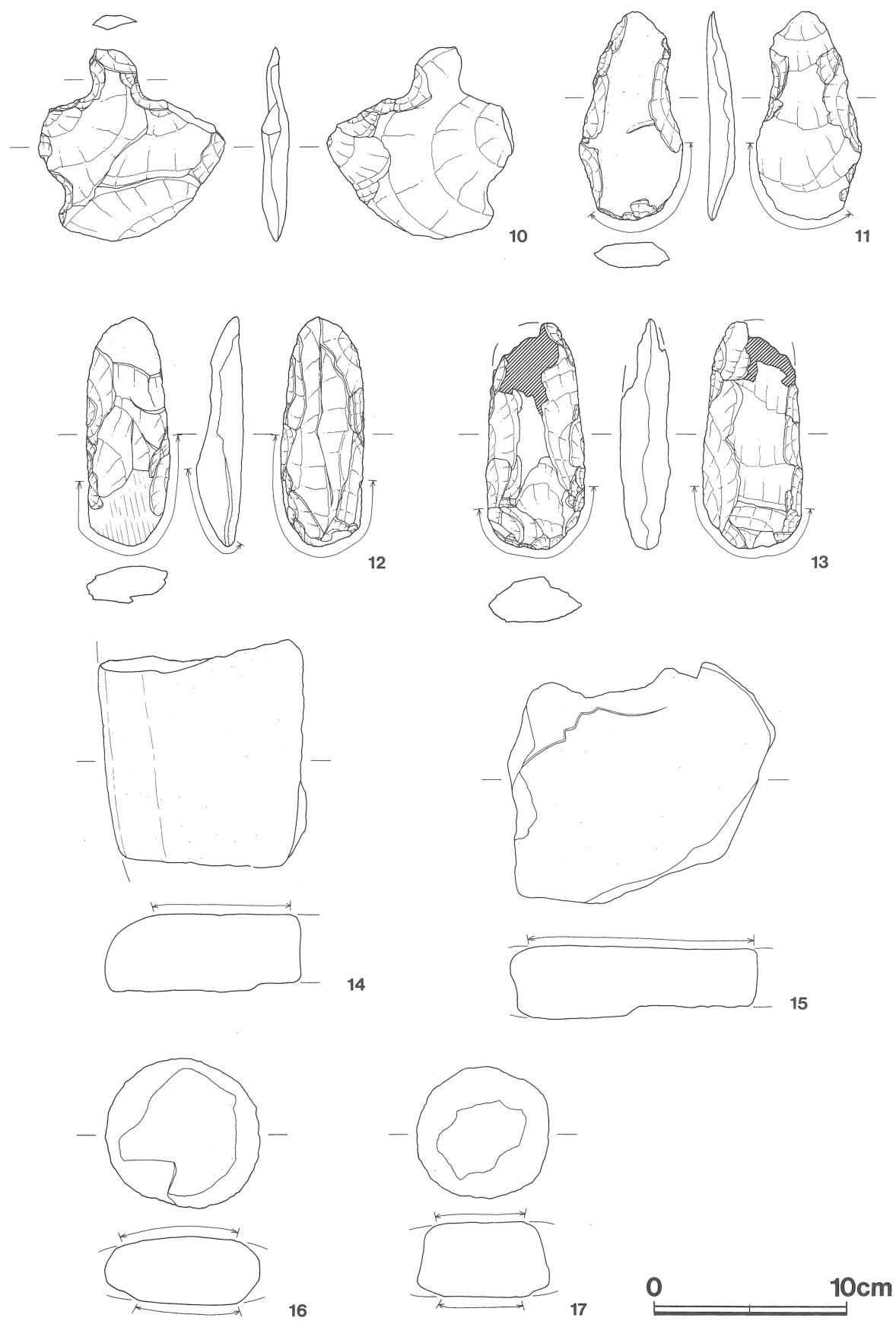
- (1) 岩井克允・松本一男ほか『中原遺跡発掘調査概報』掛川市教育委員会 1982
- (2) 松本一男『中原遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会 1984
- (3) 西村正樹『阿玉台式土器編年的研究の概要—利根川下流域を中心として—』「早稲田大学研究紀要18」 1972
- (4) 間壁忠彦ほか『里木貝塚』倉敷考古館研究集第7号 倉敷考古館 1971
- (5) 永峯光一編『縄文土器大成2』講談社 1981
- (6) 松井一明ほか『袋井市大畑遺跡 1981年度の発掘調査概報』袋井市教育委員会 1982



第24図 出土土製品



第25図 出土石器(1)



第26図 出土石器(2)

III 成 果 と 課 題

今回の調査で検出した遺構は、主たるもののが多数のピットであることからあまり成果のない調査であったかのように思われるがちである。しかし、こうした内容の調査であってもいくつかの成果と問題点があげられるのである。この項では、その成果と問題点を述べ本報告のまとめに代えたい。

遺構の項でもふれたように、今回の発掘調査では多くのピットを検出した。ただこれらの多数のピットはただ漠然と分布しているのではなく、住居跡等構築物の存在を思わせるかのように群を成していることに注目していただきたい。遺構の項では、①遺物が周辺に集中して出土している、②ピットの断面形態が柱穴状を成していること、③住居跡等の構築物が想定できるピットの配置であることの3点のうちいずれかの条件を充たしているものを群として扱った。①を確認するために第27図を参照していただきたい。この図は、本報で紹介した土器のみの出土位置を印したものであるが、グループ1・2・3とした付近に土器が集中して出土していることがわかる。これらは、炉跡等の欠如から住居跡としての条件を充たすものでないが、住居跡等の構築物の存在を示すものと考えたい。このように群としてとらえたものは全部で調査地内に7カ所確認でき、本調査地が縄文時代中期の集落跡内に位置していたことがわかった。このことから（本調査地点だけで理解されるものでないが）集落跡における住居跡の配置の問題等が派生してくるのである。

第27図を再度観ていただきたい。土器の出土状況に偏りがあることに注目したい。土器出土量の多い所に当時の人々の動きがあったと仮定すると、出土量の多かった調査区の北寄りに人々は多く足を運んだと解釈でき、集落の中心部が調査区の北側に位置しているのではないかという想定もできるようになる。

次に溝状遺構について。今回の調査で確認した溝状遺構は、全部で3条である。このうちSD02とSD03について注目したい。両者は、出土した遺物がないことから時期不明の取り扱いとなってしまった。さらに確認面からの深さも浅い為に全貌がつかめない状況である。しかし、両者は平面形でL字状に曲がるという共通点をもっており、そこに構築物（例えば墳丘等）の存在も想定できるのである。今後周辺を調査する際に注意を施したい。

さて、遺物である。調査で得た遺物の量は非常に少なく、土器は小破片のものが大部分であった。しかし、小破片であっても中原遺跡の人々が、縄文時代中期という時代に、どんな地域と係わりをもっていたのかということを知ることができたという点において大きな成果を得た。ただ残念なことに、個々の土器型式がどの土器型式と時期を同じくするものであるかという編年の問題は解決できなかった。特に、大畠遺跡および中原遺跡出土の在地の土器群、ならびに北屋敷式土器の実態について不明な点が多いものについての検討は、今後の調査に期待するものである。

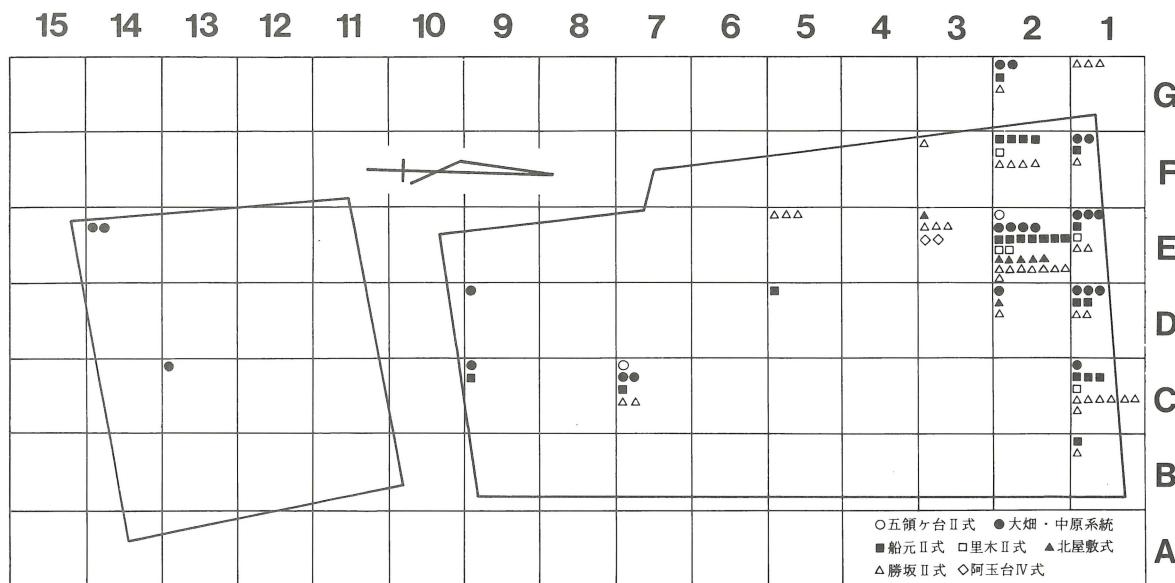
次に、土製円板と石錘の出土についてである。両者の出土量は、これまでになってきた中原遺跡の調査と比較して特に目立つ多さである。これに対し、どの縄文時代遺跡の調査でも必ずといつていいほど出土する石錘が、一点も出土しなかった。これらは、これまでの調査から知り得ていた中原遺

跡の縄文時代における生業の状況の解釈を変える、大きな発見であると考える。と同時に、土製円板の使用に関する検討が必要となった。今後の課題の一つである。

以上簡単であるが、思いつくままに成果と今後の課題を列記した。いずれにしても、一つの問題を解決するためには、一遺跡の状況だけではなく多くの遺跡の状況を踏まえなくてはならない。したがってここでも、「今後の資料の増加を待って、問題解決にあたりたい。」という言葉をもって終わりとする。

(参考文献)

- (1) 松本一男『中原遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会 1984
- (2) 松井一明ほか『袋井市大畑遺跡—1981年度の発掘調査概報』袋井市教育委員会 1982

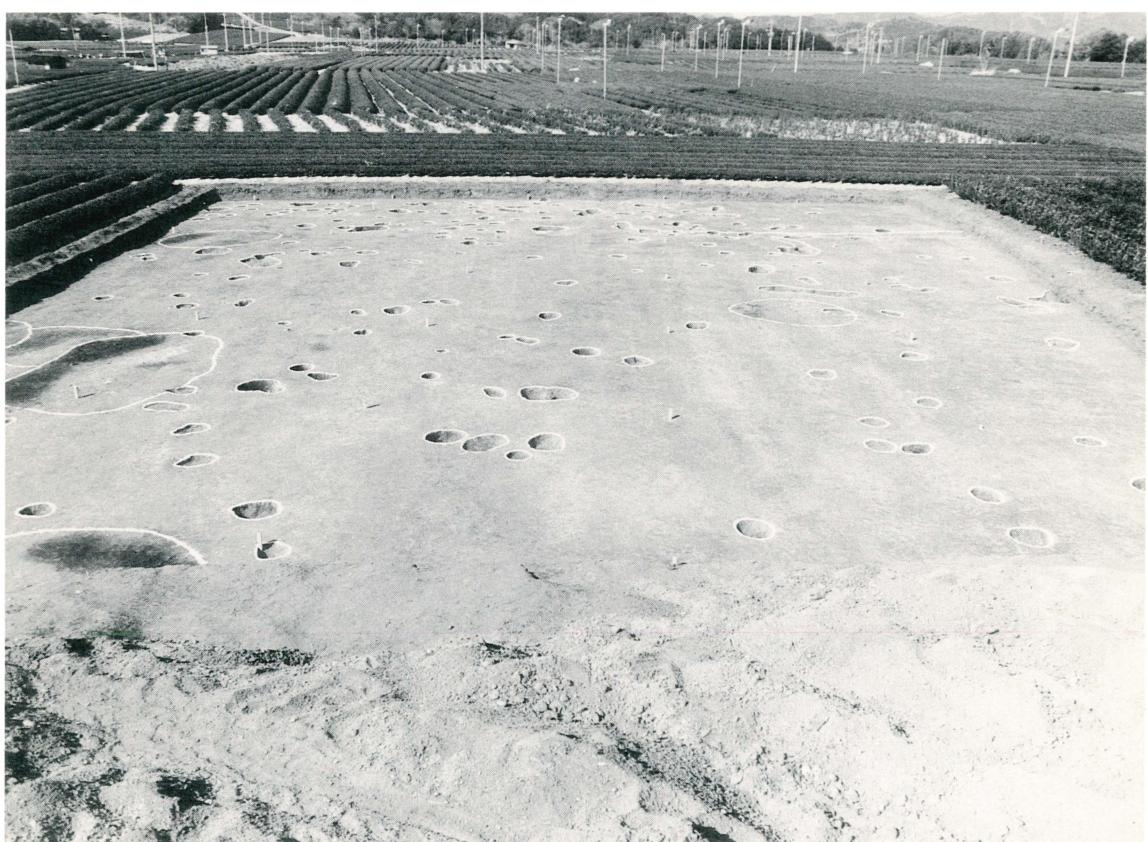


第27図 出土土器分布図

図 版

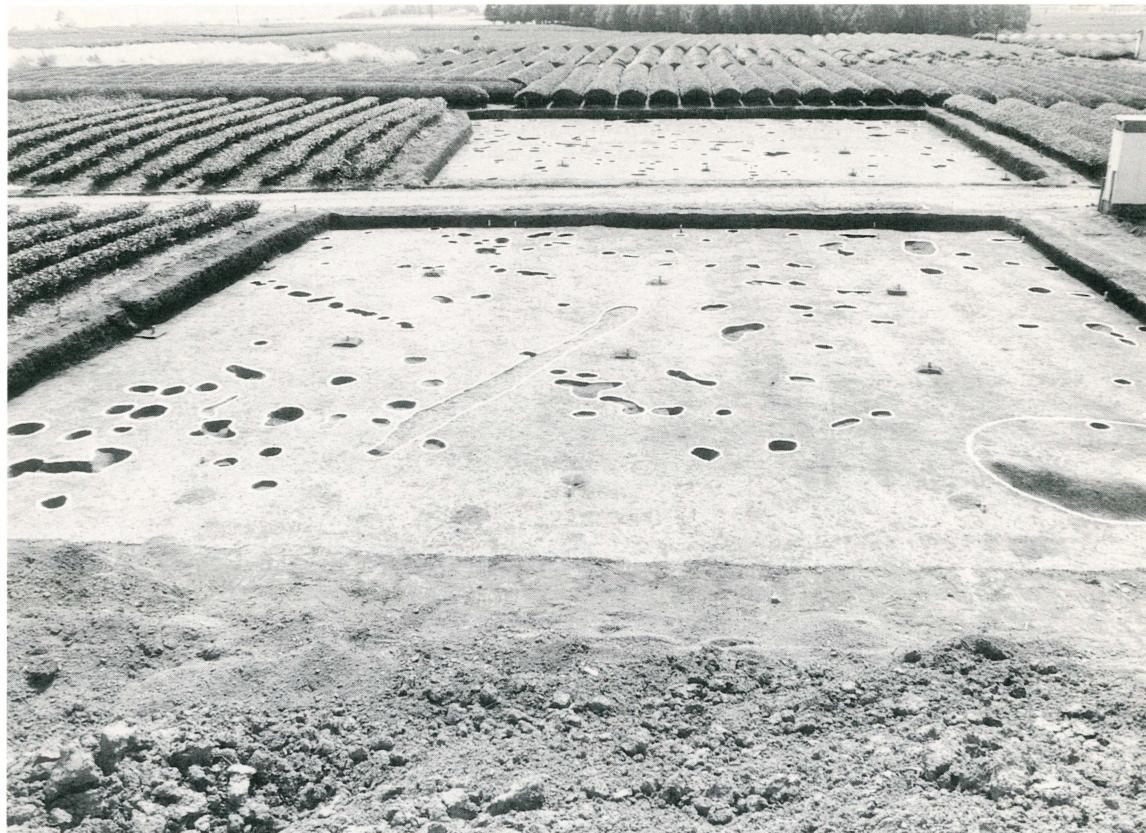


調査前全景（南から）



北区完掘状況（南から）

図版
II



中央区完掘状況（北から）



南区完掘状況（北から）

図版
III



作業風景



重機稼動風景

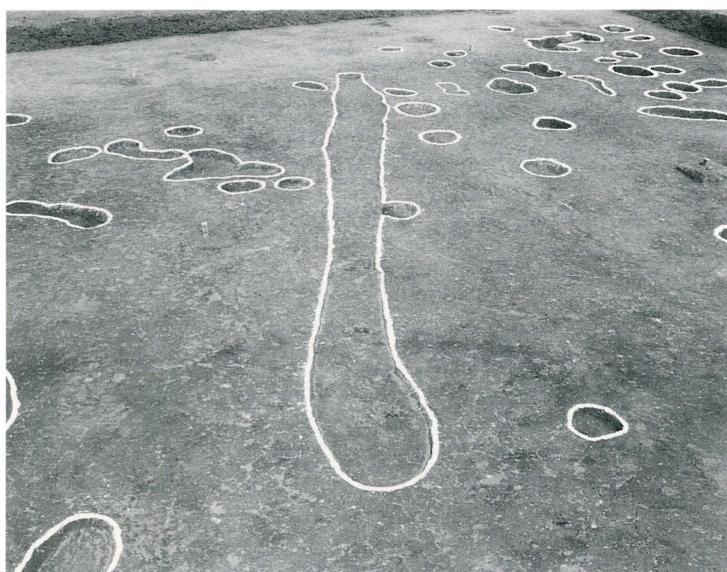


調査区埋戻し

図版
IV



SD01 完掘状況（西から）



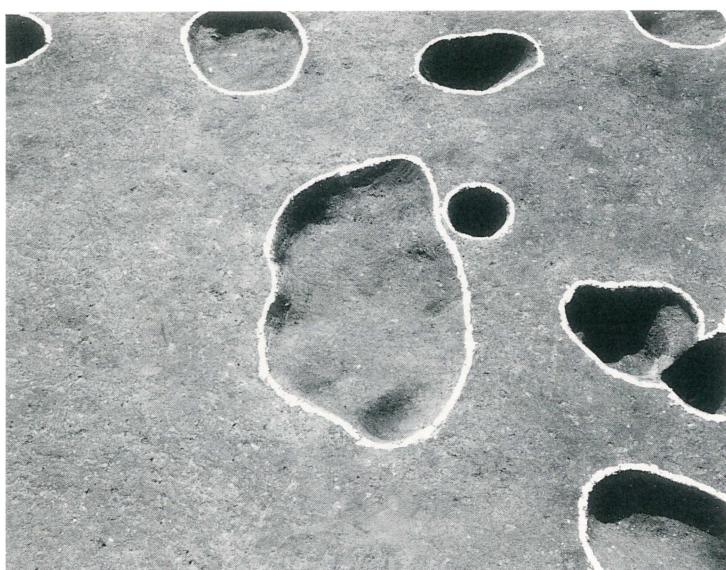
SD03 完掘状況（南から）



SF01 完掘状況（北から）



SF07 完掘状況（南から）



SF08 完掘状況（北から）



SF10 完掘状況（北東から）

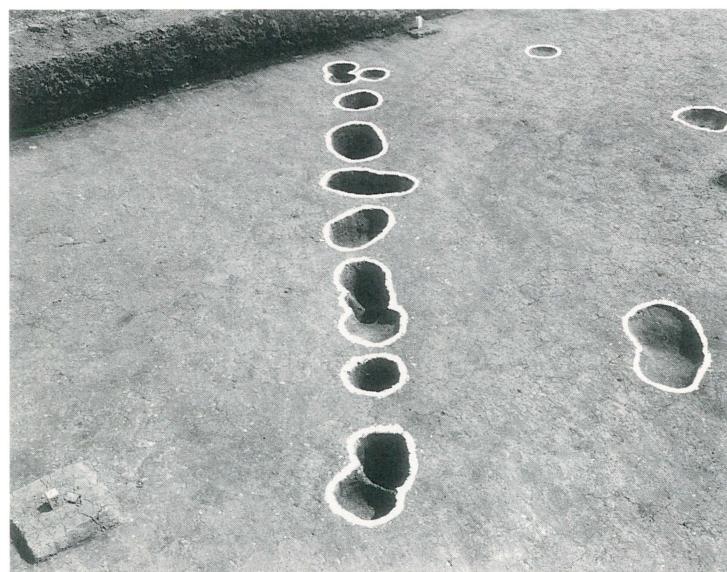
図版
VI



SF12 完掘状況（北から）



グループ3 ピット完掘状況
(南西から)

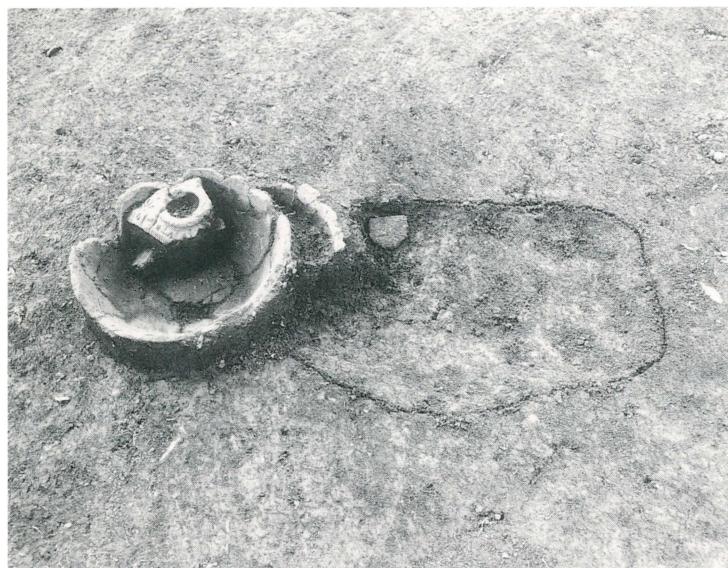


グループ4 ピット完掘状況
(北西から)

図版
VII



グループ6 ピット完掘状況
(北から)

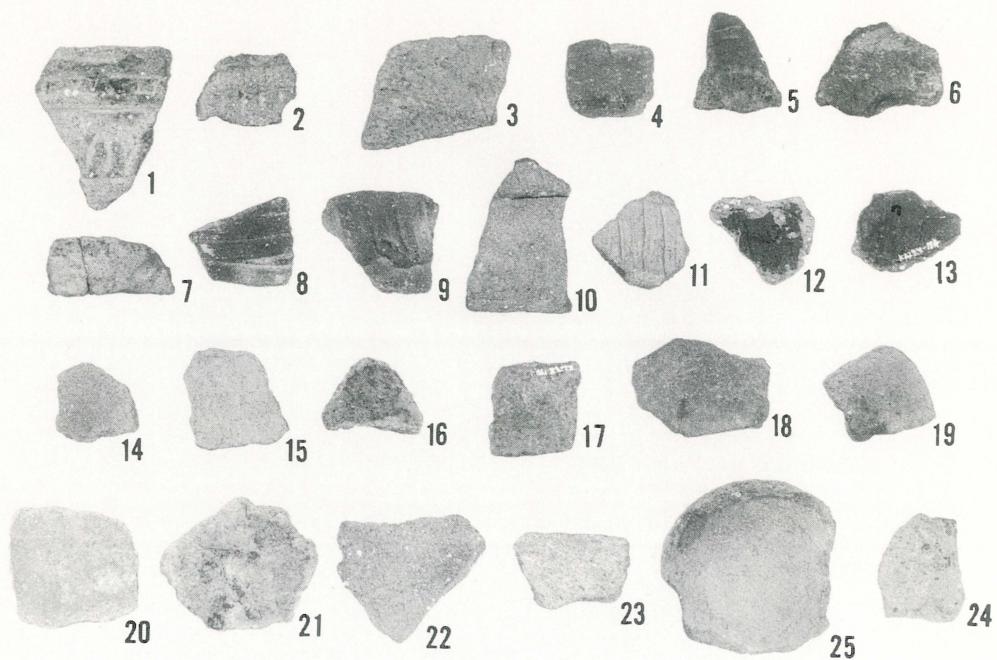


SP222・223 遺物出土状況
(東から)

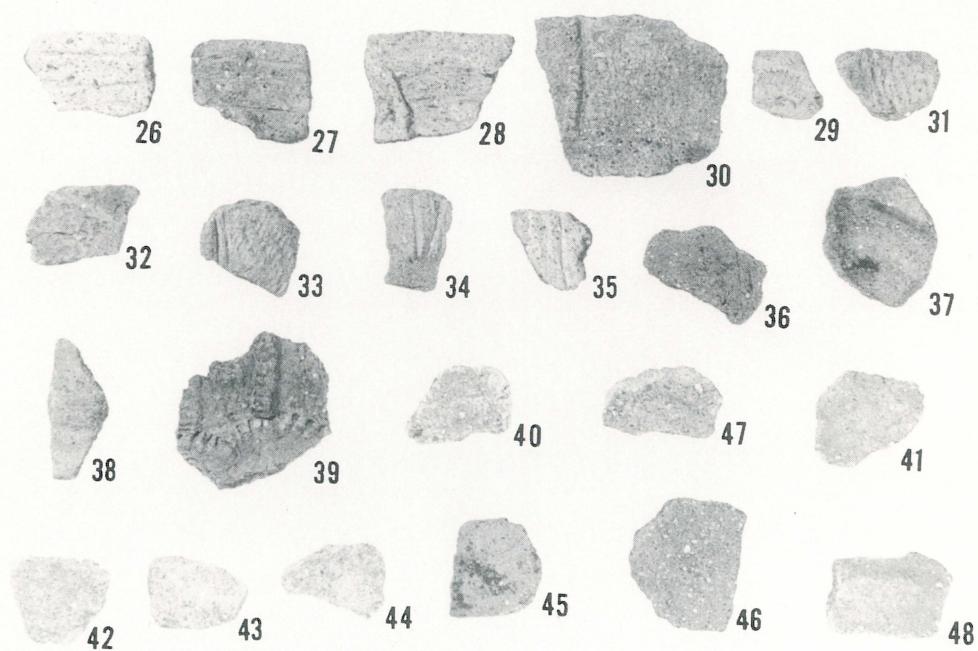


SP88 遺物出土状況
(南東から)

図版
VIII

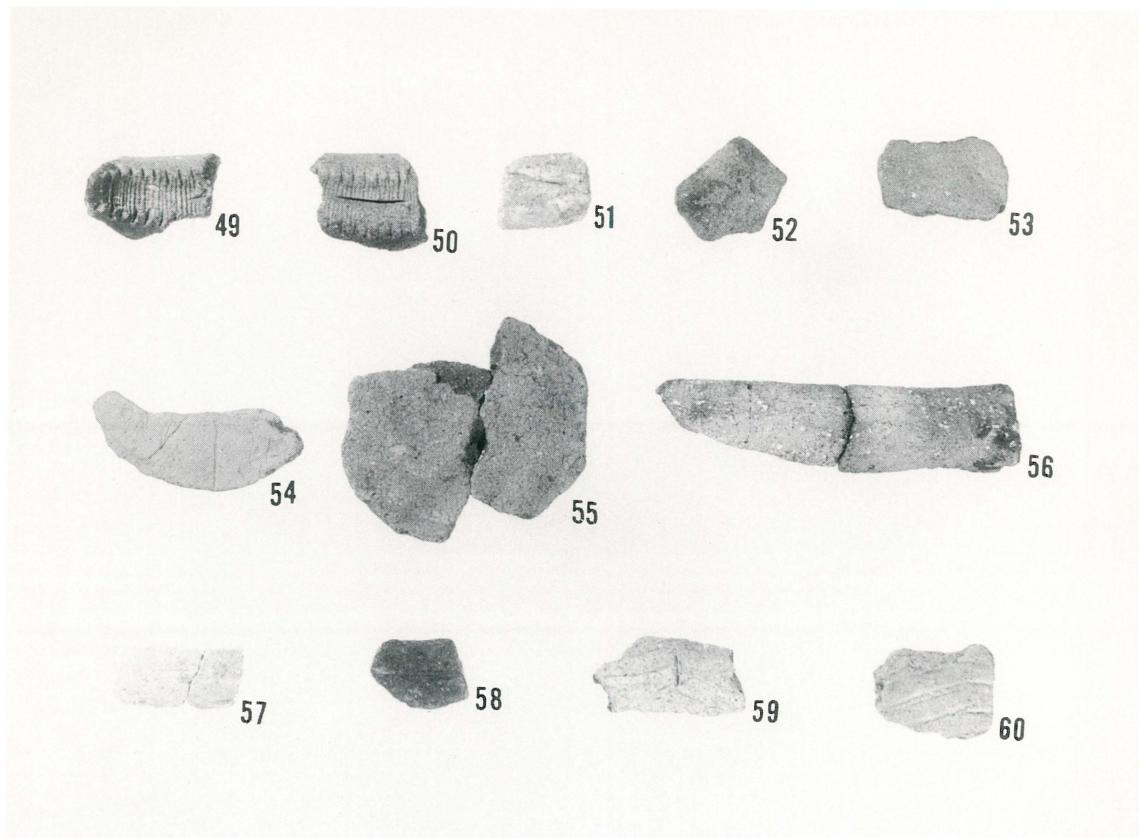


出土土器 (1~25)

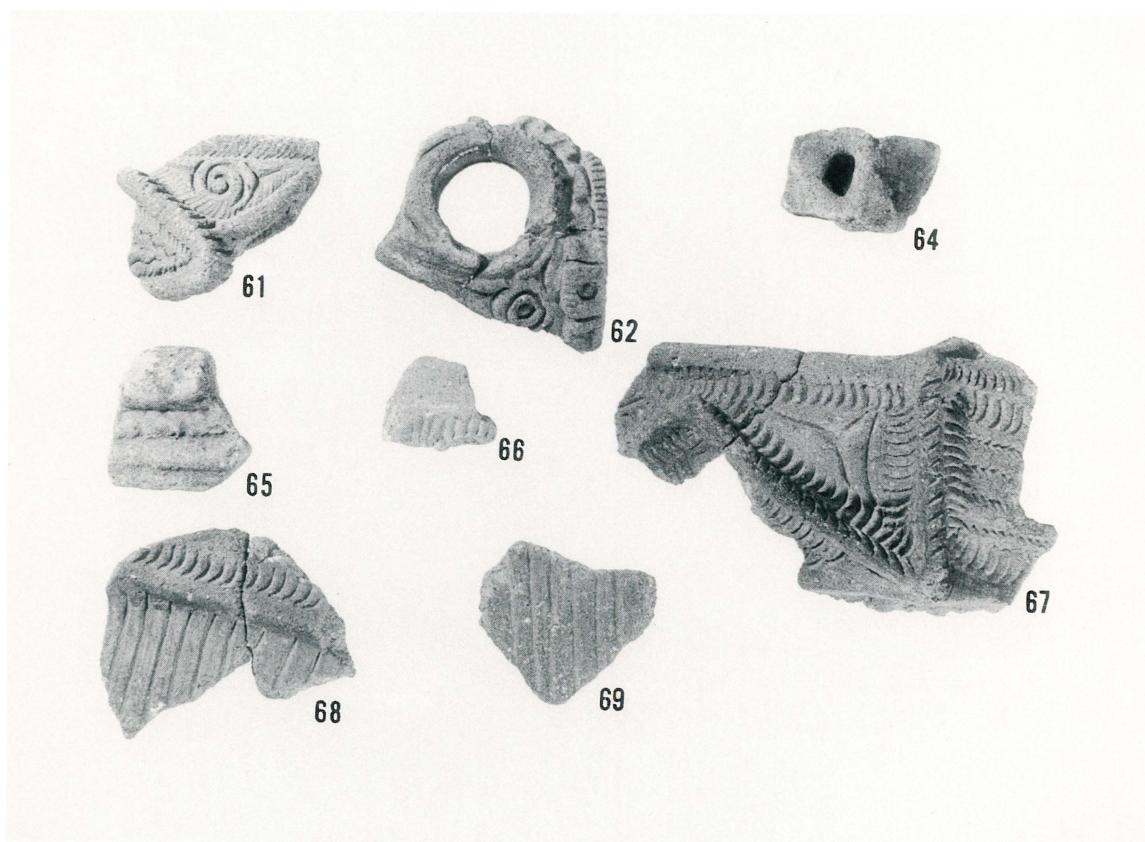


出土土器 (26~48)

図版
IX

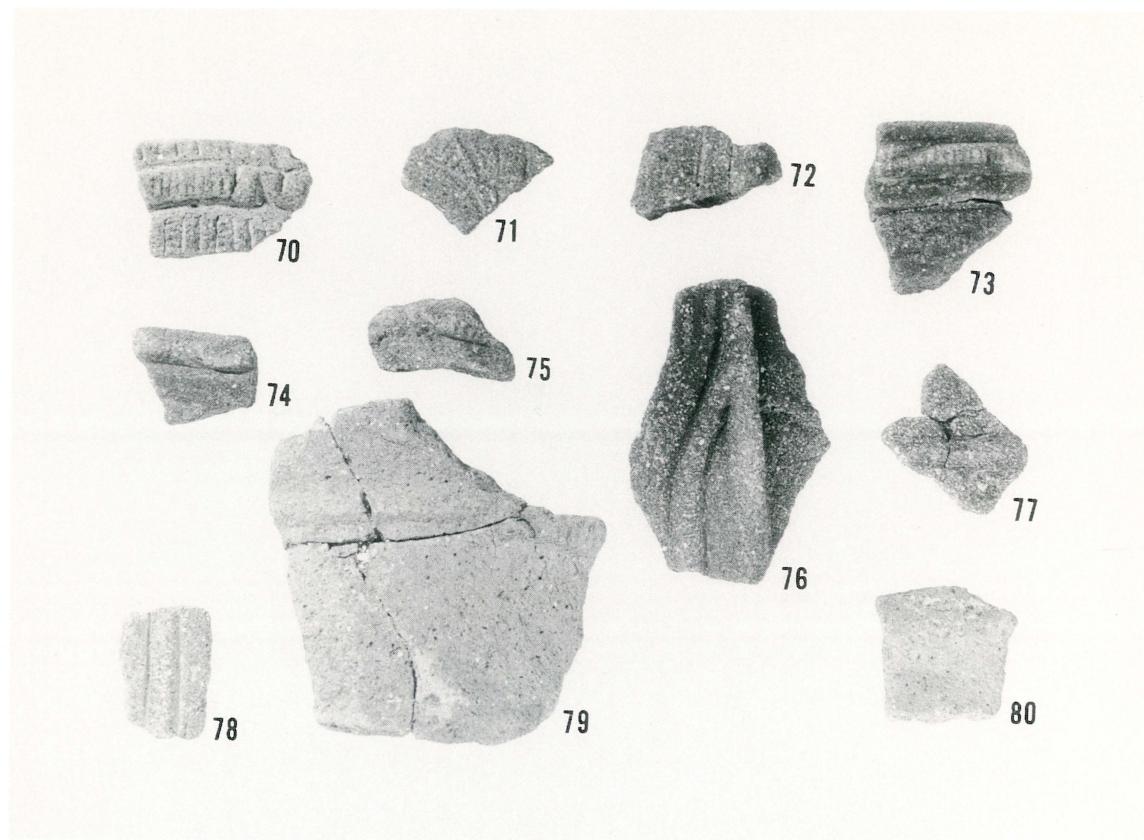


出土土器 (49~60)

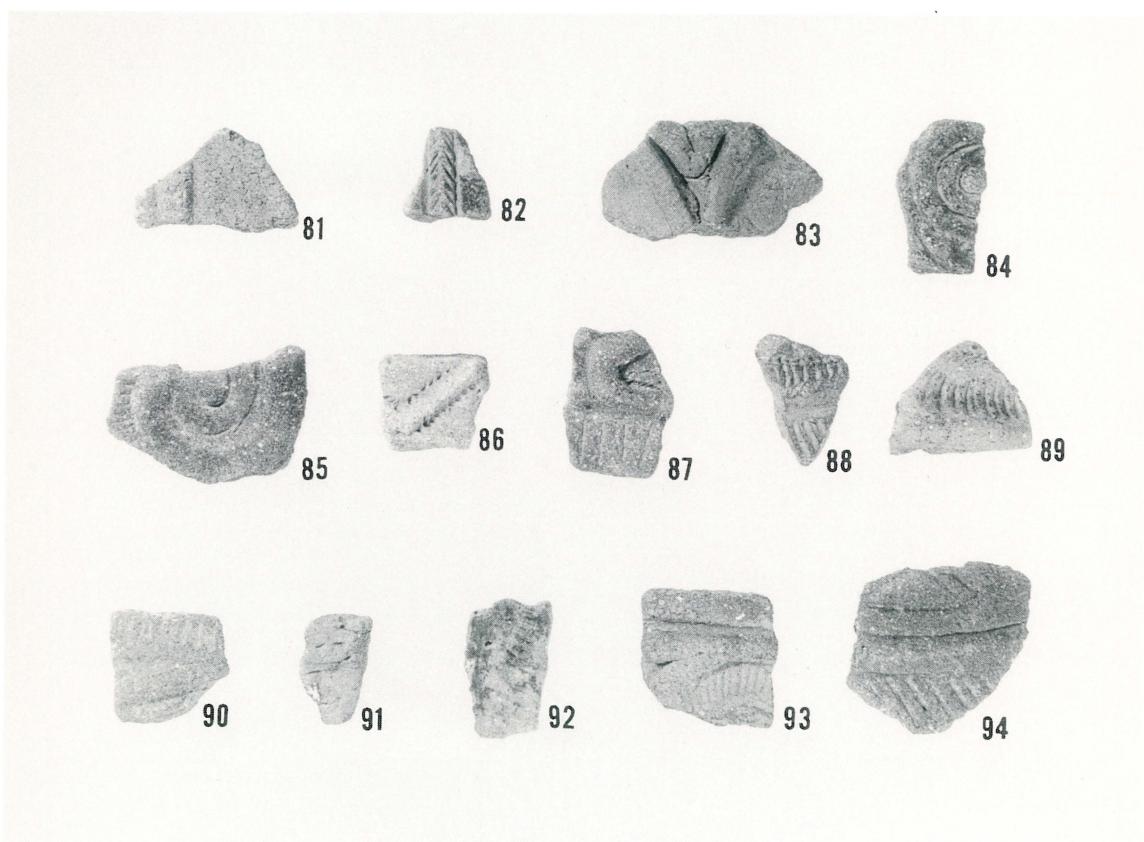


出土土器 (61・62・64~69)

図版
X

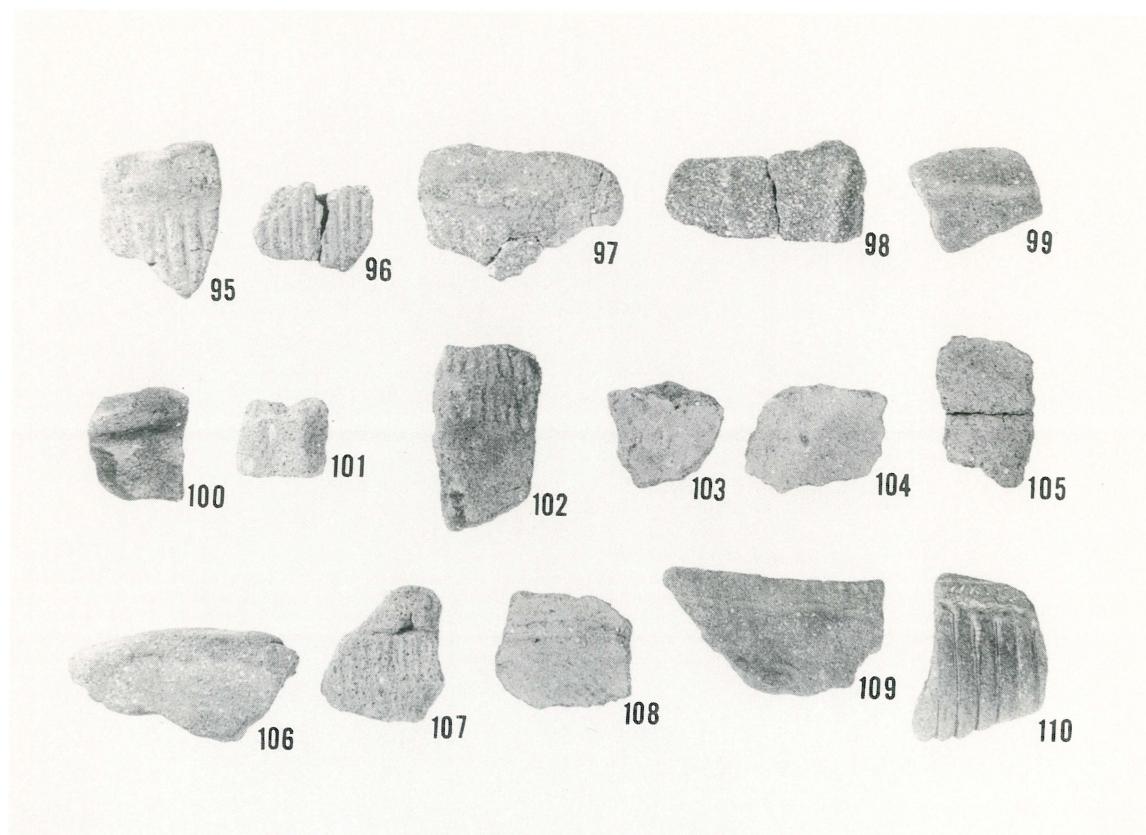


出土土器 (70~80)



出土土器 (81~94)

図版
XI

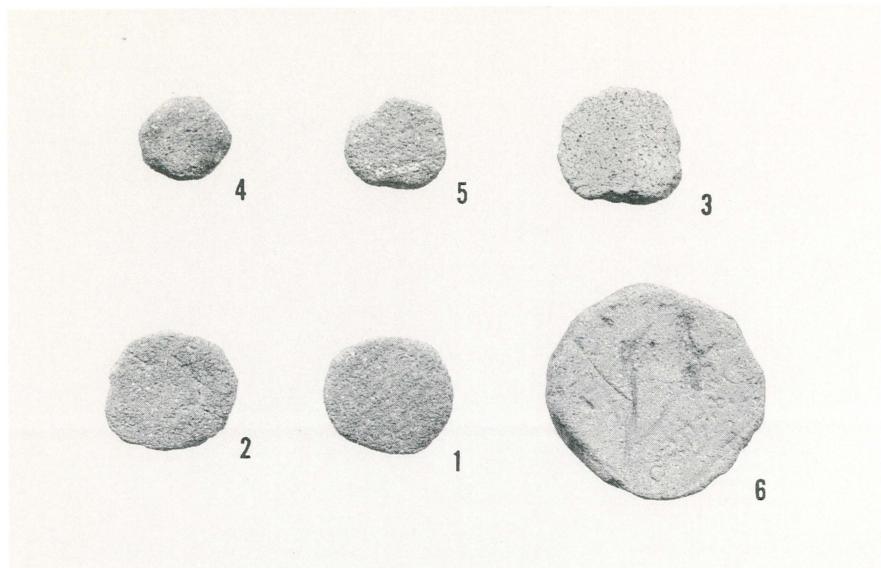


出土土器 (95~110)

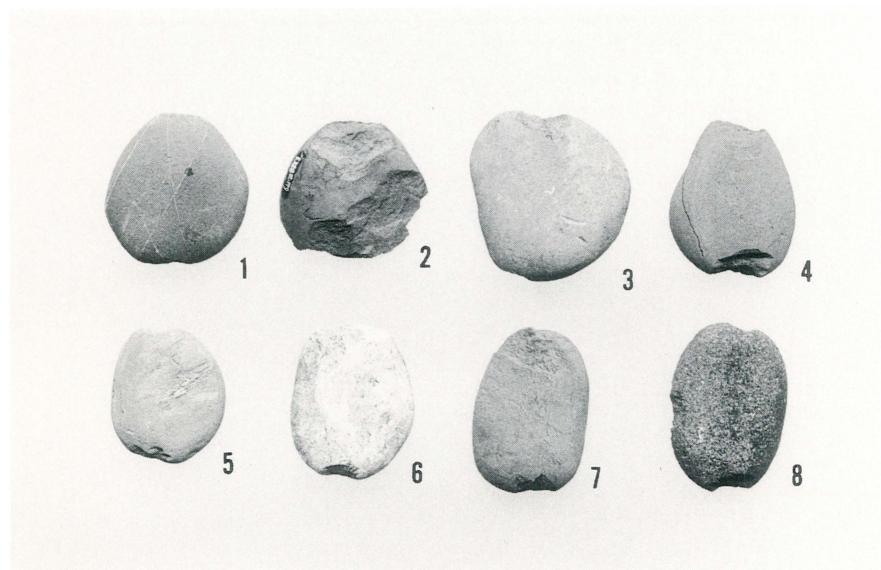


出土土器 (63)

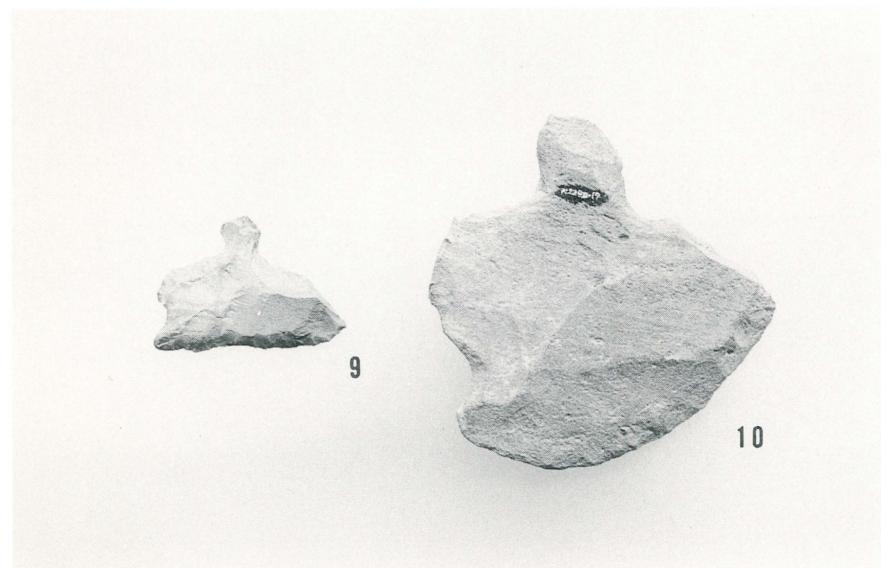
図版
XII



出土土製品

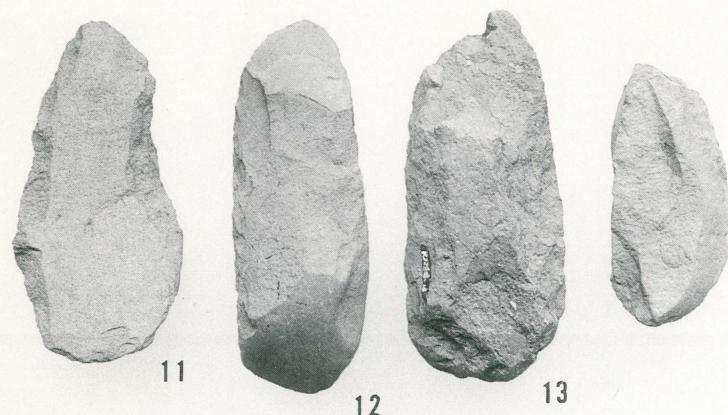


出土石器（石錘）

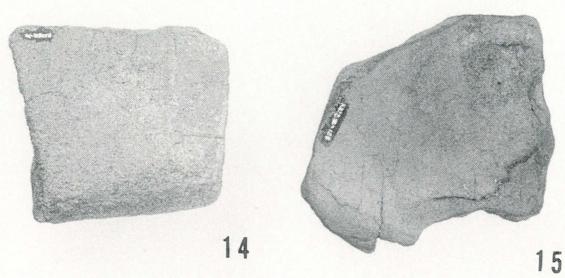


出土石器（石匙）

図版
XIII



出土石器（打製石斧）



出土石器（石皿）



出土石器（磨石）

中原遺跡

発掘調査報告書

昭和63年3月31日

掛川市教育委員会

編集発行 掛川市水垂51
TEL (0537) 24-7773

株式会社 三創

印 刷 所 静岡市中村町166-1
TEL (0542) 82-4031

